Tokyo Philharmonic Orchestra

Season 2024 subscription series

Booklet

2024シーズン定期演奏会

2024
9

東京フィルハーモニー交響楽団

English pages inside

©上野隆文

本日はご来場いただき、まことにありがとうございます
歴史を紡ぎ未来へと奏でるオーケストラの調べを
心ゆくまでお楽しみください

東京フィルハーモニー交響楽団

オフィシャル・サプライヤー

SONY　Rakuten Mobile　マルハニ　LOTTE　ゆうちょ銀行

公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団は上記の企業から特別なご支援をいただいております。

マエストロ チョン・ミョンフン
ヴェルディ『マクベス』を語る

このオペラは歴史上みられる非常に陰惨な命題、権力と権力への欲望にかかわるテーマを描いています。とても不快なドラマですが、人生のすべてがただ幸せで陽の当たるものとは限りません。ですからこの作品は暗い意味で高度にドラマティックな作品なのです。

ご存知のようにヴェルディはシェイクスピアの大ファンでした。ヴェルディは彼に魅了され、音楽人生の大きな部分を捧げました。『マクベス』はこれまで私たちが上演したヴェルディ＝シェイクスピア・オペラの2作品（2022年『ファルスタッフ』、2023年『オテロ』）よりもずっと初期の作品ですが、ヴェルディ自身は初期の自作の中で最高傑作と感じていたと思います。

ヴェルディは彼の芸術を刷新し続けました。ですから、初期のこの作品『マクベス』は宝石の原石と呼ぶこともできるでしょう。『ファルスタッフ』や『オテロ』のように洗練されてはいませんが、極めて質の高いダイヤモンドの原石だということができます。

この3つのオペラを通じてヴェルディの音楽人生の発展を追うことができるのはとても興味深いことなのです。

名誉音楽監督チョン・ミョンフン指揮東京フィル《オペラ演奏会形式》では2022年より、シェイクスピアの戯曲をもとにヴェルディが作曲したオペラ『ファルスタッフ』『オテロ』を続けて上演してきました。今回の『マクベス』で全3作上演が完遂となります。

第1004回オーチャード定期演奏会
9月15日(日) 15:00開演　Bunkamura オーチャードホール

第1005回サントリー定期シリーズ
9月17日(火) 19:00開演　サントリーホール

第164回東京オペラシティ定期シリーズ
9月19日(木) 19:00開演　東京オペラシティ コンサートホール

指揮：チョン・ミョンフン

マクベス：セバスティアン・カターナ(バリトン)
マクベス夫人：ヴィットリア・イェオ(ソプラノ)
バンクォー：アルベルト・ペーゼンドルファー(バス)※
マクダフ：ステファノ・セッコ(テノール)
マルコム：小原啓楼(テノール)
マクベス夫人の侍女：但馬由香(メゾ・ソプラノ)
医者：伊藤貴之(バス)
マクベスの従者、刺客、伝令：市川宥一郎(バリトン)
第一の幻影：山本竜介(バリトン)
第二の幻影：北原瑠美(ソプラノ)
第三の幻影：吉田桃子(ソプラノ)
合唱：新国立劇場合唱団(合唱指揮：冨平恭平)
コンサートマスター：近藤 薫

舞台監督：幸泉浩司、近藤 元(アートクリエイション)
舞台監督助手：小田原 築、堀井基弘(アートクリエイション)
照明：喜多村 貴(劇光社)
音響：オルフェオ
衣裳：東京衣裳
ヘアメイク：趙 英
小道具：アートクリエイション
字幕：本谷麻子
字幕操作：塩谷奈々(Zimakuプラス)
音楽スタッフ：古瀬安子、山中麻鈴
通訳：村上眞理(イタリア語)

※当初の発表から変更となりました。

オペラ演奏会形式

ヴェルディ：歌劇『マクベス』（リコルディ／1865年パリ改訂版）

全4幕・日本語字幕付き原語（イタリア語）上演
原作：ウィリアム・シェイクスピア『マクベス』
台本：フランチェスコ・マリア・ピアーヴェ、アンドレア・マッフェイ

第1幕（約50分）

第2幕（約30分）

― 休 憩（約20分）―

第3幕（約20分）

第4幕（約40分）

上演時間：約2時間45分（休憩含む）

主催: 公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団
助成: 文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術等総合支援事業（創造団体支援））|
独立行政法人日本芸術文化振興会
公益財団法人 三菱UFJ信託芸術文化財団（9/17公演）
公益財団法人アフィニス文化財団

「音楽文化の担い手としてのプロ・オーケストラが主催する、わが国ならびに各楽団が活動の重点を置いている地域にとって意義がある企画」を対象としています。

後援: NPO法人日本ヴェルディ協会、日本シェイクスピア協会
協力: Bunkamura（9/15公演）

♪本公演は全席指定です。指定のお席にご着席ください。演奏開始間際の入場の際にはスタッフの案内で入場券記載とは異なる席への着席をお願いすることがございます。
♪演奏中のご入場は、かたくお断りいたします。楽章間のご入場は楽曲の進行によりスタッフがご案内いたします。入場いただけない場合もございますのでご了承ください。
♪曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬよう、ご配慮いただければ幸いです。
♪演奏中に、時計やスマートフォンのアラーム音等が鳴らないよう、いま一度ご確認ください。
♪演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございますので、ご配慮くださいますようお願いいたします。

出演者プロフィール

©上野隆文

指揮

チョン・ミョンフン

Myung-Whun Chung, conductor

東京フィルハーモニー交響楽団 名誉音楽監督

韓国ソウル生まれ。マンネス音楽学校、ジュリアード音楽院でピアノと指揮法を学ぶ。1974年チャイコフスキー国際コンクール ピアノ部門第2位。その後ロスアンジェルス・フィルにてジュリーニのアシスタントとなり、後に副指揮者。ザールブリュッケン放送響音楽監督および首席指揮者（1984～1989）、パリ・オペラ座バスティーユ音楽監督（1989～1994）、ローマ・サンタチェチーリア管首席指揮者（1997～2005）、フランス国立放送フィル音楽監督（2000～2015。現在は名誉音楽監督）、ソウル・フィル音楽監督（2006～2015）、シュターツカペレ・ドレスデンの首席客演指揮者（2012～）など歴任。1997年に本人が創設したアジア・フィルの音楽監督も務める。2022年6月、イタリア共和国功績勲章であるグランドオフィサーの称号を長年にわたるイタリアの文化発展への貢献に対して受勲。2023年3月、イタリア・ミラノのスカラ・フィルハーモニー管弦楽団として初めての名誉指揮者に就任した。

2001年東京フィルハーモニー交響楽団のスペシャル・アーティスティック・アドヴァイザーに就任、2010年より桂冠名誉指揮者、2016年9月に名誉音楽監督に就任。ピアニストとして室内楽公演に出演するほか、アジアの若い演奏家への支援、ユニセフ親善大使、アジアの平和を願う活動など多岐にわたり活躍している。

マクベス（バリトン）

セバスティアン・カターナ

Sebastian Catana, Macbeth (baritone)

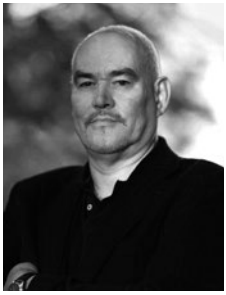
ルーマニア生まれのセバスティアン・カターナは、同世代で最も興味深いヴェルディ歌手、そしてヴェリズモ・バリトンの一人として注目を集めている。2001年カーネギーホールでの『ユグノー教徒』トールでオペラ・デビュー、2003年D.オーレン指揮『ラ・ボエーム』ショナールでMETデビュー。同劇場ではその後も様々な作品に出演。2007年、ボローニャ市立劇場『シモン・ボッカネグラ』パオロで欧州デビュー。『トスカ』スカルピア（オペラ・バスティーユ）、『カヴァレリア・ルスティカーナ』アルフィオ／トニオ（ヴェローナ、伊カリアリ等）、『ラ・ジョコンダ』バルナバ、カゼッラ『蛇女』デモゴーゴン（トリノ）、トゥティーノ『二人の女』欧州初演（カリアリ）ジョヴァンニなどのほか、『アイーダ』『マクベス』『ナブッコ』『椿姫』『リゴレット』『イル・トロヴァトーレ』『オテロ』『ファルスタッフ』といった数々のヴェルディ作品でタイトルロールを含む主要な役で出演。欧州はじめ中東、南米を含む世界各地で活躍しており、今後もこれらの作品で更なる登場が予定されている。チョン・ミョンフン指揮東京フィルには2022年『ファルスタッフ』以来2回目の登場となる。

マクベス夫人（ソプラノ）

ヴィットリア・イェオ

Vittoria Yeo, Lady Macbeth (soprano)

韓国ソウル生まれ。ソウル・西京大学校を経てイタリアに渡り、パルマのアッリーゴ・ボーイト音楽院、シエナのキジアーナ音楽院を経てモデナのヴェッキ=トネッリ高等音楽学校でライナ・カバイヴァンスカに師事し最高の成績で卒業。2015年R. ムーティ指揮『エルナーニ』エルヴィーラでザルツブルク音楽祭デビューし国際的なキャリアをスタート。2017年に同音楽祭『アイーダ』でタイトルロールを演じた。ほかに『マクベス』マクベス夫人、『蝶々夫人』タイトルロール、『コジ・ファン・トゥッテ』フィオルディリージ、『トゥーランドット』リュー、『イル・トロヴァトーレ』レオノーラ、『ラ・ボエーム』ミミ、『アイーダ』『ノルマ』タイトルロール、『オテロ』デズデモーナなど出演多数。ソリストとしてはアレーナ・ディ・ヴェローナにてモーツァルト「レクイエム」（2020）、R. ムーティ指揮シカゴ響ヴェルディ「レクイエム」（2018）に出演したほか2019年にはバーデン・バーデン音楽祭にてベルリン・フィルと、2022年にはブルゴス大聖堂でマドリード王立劇場の中心メンバーと共演している。チョン・ミョンフン指揮東京フィルには2016年『蝶々夫人』以来2回目の登場となる。



バンクォー（バス）

アルベルト・ペーゼンドルファー

Albert Pesendorfer, Banquo (bass)

オーストリアのバス歌手アルベルト・ペーゼンドルファーは、ドイツ系レパートリーを得意とする歌手の中で最も人気を集めるひとりである。世界各地の劇場や音楽祭に出演する彼の音楽性の多様さはイタリアやスラヴ系の作品でも高く評価され、ワーグナーやイタリア系の作品を中心に70以上の役をレパートリーとしている。ウィーン楽友協会、ウィーン・コンツェルトハウス、ベルリン・フィル、ロンドンのバービカン・ホールをはじめ日本や米国でも活躍。2016/2017年には新国立劇場『ワルキューレ』フンディング、『神々の黄昏』ハーゲンとしても出演した。2024/2025シーズンのハイライトとして、東京フィルハーモニー交響楽団とのヴェルディ『マクベス』（バンクォー）、ボローニャ市立歌劇場での『ワルキューレ』（フンディング）、東京交響楽団との『ばらの騎士』（オックス男爵）、『アラベラ』（ヴァルドナー伯爵）、ベルリン・ドイツ・オペラでの『ニュルンベルクのマイスタージンガー』（ファイト・ポーグナー）が予定されている。現在、ベルリン芸術大学で声楽教授も務めている。

マクダフ（テノール）

ステファノ・セッコ

Stefano Secco, Macduff (tenor)

イタリア・ミラノ生まれ。アルベルト・ソレジーナにピアノと歌を学び、フランコ・コレッリ、フランカ・マッテュッチ、レイラ・ジェンチェル、レナータ・スコットに師事した。イタリアのすべての主要な歌劇場に登場しており、ボローニャ、パルマ、ローマでは『ラ・ボエーム』ロドルフォ、トリノとフィレンツェでは『リゴレット』マントヴァ公爵、ローマでは『蝶々夫人』ピンカートン、ミラノ・スカラ座では『椿姫』アルフレードおよび『マクベス』マクダフとして出演。最近の出演には、ウィーン国立歌劇場『ウェルテル』『トスカ』、サレルノでの『ランメルモールのルチア』、ヴェネツィアでの『マクベス』『椿姫』、ミラノ・スカラ座とアルジェでのニューイヤー・ガラ、ナントとレンヌでの『仮面舞踏会』、ニースでの『ファウスト』、トリエステでのロッシーニ「スターバト・マーテル」、伊バーリでの『ラ・ボエーム』、マルセイユ『ルイザ・ミラー』など。パッパーノ指揮ロンドン響とのダッラピッコラ『囚人』、パドヴァ・ヴェネト管弦楽団によるプッチーニ『ロマンツェ』オーケストラ版世界初演、メッシーナでの『トスカ』『ノルマ』、ボローニャ市立歌劇場での『シチリアの晩鐘』などがある。

マルコム（テノール）

小原啓楼

Keiroh Ohara, Malcolm (tenor)

東京藝術大学卒業、同大学院修了、博士号取得。新国立劇場『沈黙』ロドリゴ、『オテロ』カッシオ、日生劇場『リア』エドマンドの他、ロームシアター京都及び二期会『フィデリオ』フロレスタンでの力強い歌唱が絶賛を浴びる一方、新国立劇場『夕鶴』与ひょうにおける繊細な日本語歌唱も美しく、高い評価を得ている。同役では、外務省主催「ロシアにおける日本年」に参加、マリインスキー劇場でも演じる等国内外で活躍。二期会およびびわ湖ホール『ローエングリン』タイトルロールも好評を博した。オーケストラ・コンサートでも、モーツァルト、ロッシーニ、ロイド=ウェバー等の「レクイエム」、ロッシーニ、ドヴォルザークの「スターバト・マーテル」、ベートーヴェン「第九」、ブリテン「戦争レクイエム」等古典から現代作品までレパートリーも幅広い。愛知県立芸術大学教授。二期会会員。

©FUKAYA Yoshinobu/auraY2

マクベス夫人の侍女（メゾ・ソプラノ）

但馬由香

Yuka Tajima, Lady-in-Waiting to Lady Macbeth (mezzo-soprano)

武蔵野音楽大学卒業、同大学大学院修了。第50回日伊声楽コンコルソ入選。第31回飯塚新人音楽コンクール第1位。藤原歌劇団には、『ラ・チェネレントラ』のティーズベでデビュー以降、『どろぼうかささぎ』ピッポ、『カルメル会修道女の対話』シャルレ修道女、『セビリャの理髪師』ベルタ、『ノルマ』クロティルデ、『蝶々夫人』スズキ等の諸役で活躍。2018年には『ラ・チェネレントラ』のアンジェリーナでロールデビューし好評を得た。その他、新国立劇場『夏の夜の夢』ハーミア、『蝶々夫人』同役、『カルメン』メルセデスで出演。また、「第九」「メサイア」、ペルゴレージ「スターバト・マーテル」、ヴィヴァルディ「グローリア・ミサ」、モーツァルト「レクイエム」「戴冠ミサ」等、宗教曲のソリストとしても活躍している。藤原歌劇団団員。

医者（バス）

伊藤貴之

Takayuki Ito, A Doctor (bass)

名古屋芸術大学首席卒業、同大学大学院修了。渡伊しミラノで研鑽する。第39回イタリア声楽コンコルソ金賞、G. ゼッカ国際声楽コンクール第2位など受賞多数。留学中、『ラ・ボエーム』コッリーネ等多数のオペラに出演。新国立劇場には、開場25周年記念公演『アイーダ』国王、『ホフマン物語』ルーテル／クレスペル、日生劇場には『メデア』クレオンテ、『セビリアの理髪師』バジリオ、第60回大阪国際フェスティバル『泥棒かささぎ』ゴッタルド、藤原歌劇団公演『ファウスト』メフィストフェレス等で好評を博す。小澤征爾、秋山和慶、尾高忠明、チョン・ミョンフン、アルベルト・ゼッダ等著名指揮者との共演も多く、「第九」やヴェルディ、モーツァルト「レクイエム」などで活躍している。平成24年度愛知県芸術文化選奨『文化新人賞』、平成29年度豊田文化奨励賞受賞。藤原歌劇団団員。

マクベスの従者、刺客、伝令（バリトン）

市川宥一郎

Yuichiro Ichikawa,
Servant of Macbeth/Murderer/Herald (baritone)

昭和音楽大学卒業、同大学大学院修了。第57回日伊声楽コンコルソ第1位。2016年昭和音楽大学とソウル市立大学校の交流事業にてソウル市でのコンサートや、2017年文化庁委託事業次代の文化を創造する新進芸術家育成事業『披露演奏会 オペラ・アリアコンサート』にM. デヴィーアの推薦で出演。藤原歌劇団には2018年『ラ・チェネレントラ』のダンディーニでデビュー以降、『蝶々夫人』シャープレス、『カルメン』エスカミーリョ、『ラ・ボエーム』ショナール、『イル・カンピエッロ』アストルフィで出演し、いずれも好評を博している。日本オペラ協会には、2023年『源氏物語』の朱雀帝で出演。2023年、小澤征爾音楽塾公演『ラ・ボエーム』のショナールで抜擢され評価を得るなど、これからの活躍が期待されている新進バリトン。藤原歌劇団団員。

第一の幻影（バリトン）

山本竜介

Ryusuke Yamamoto, Apparition 1 (baritone)

昭和音楽大学音楽学部声楽科、同音楽専攻科修了。（公財）日本オペラ振興会オペラ歌手育成部修了。『ランメルモールのルチア』『椿姫』『リゴレット』『仮面舞踏会』『イル・トロヴァトーレ』『アイーダ』『ラ・ボエーム』『蝶々夫人』『トスカ』『道化師』等出演。イタリア留学中『アイーダ』アモナズロ、『愛の妙薬』ベルコーレなどミラノを中心にさまざまな演奏会に出演。兵庫県新人演奏会、モーツァルト、デュルフレ「レクイエム」にてバス・ソロを務める。藤原歌劇団、新国立劇場合唱団メンバー。

第二の幻影（ソプラノ）

北原瑠美

Rumi Kitahara, Apparition 2 (soprano)

東京藝術大学卒業、同大学院修了。二期会オペラ研修所を首席で修了。その後イタリアにて研鑽を積む。これまでに『フィガロの結婚』伯爵夫人、『ラ・ボエーム』ミミ、『魔笛』侍女、『三部作』ジョルジェッタ／アンジェリカなど多くのオペラに出演する他、ミュージカルでも活躍。近年では東京・春・音楽祭『マクベス』（リッカルド・ムーティ指揮）にて侍女役、二期会公演『午後の曳航』（ヘンツェ作曲）房子役などで出演。その演技力でも高い評価を得る。

第三の幻影（ソプラノ）

吉田桃子

Momoko Yoshida, Apparition 3 (soprano)

岐阜県出身。国立音楽大学演奏学科声楽専修卒業。卒業時に優秀者のみ選抜される平成25年度卒業演奏会及び、第36回読売中部新人演奏会に出演。二期会オペラ研修所修了。第60期修了生・成績優秀者による「二期会新進声楽家の夕べ」に出演。これまでオペレッタ『天国と地獄』キューピッド、『タンホイザー』牧童、『魔笛』童子1に出演。コンサートではブラームス「ドイツ・レクイエム」のソリスト、「STAND UP! CLASSIC FESTIVAL 2023」ソリストとして出演。新国立劇場合唱団メンバー。

©上野隆文

合唱　新国立劇場合唱団（合唱指揮：冨平恭平）

New National Theatre Chorus (Kyohei Tomihira, chorusmaster)

新国立劇場は、オペラ、バレエ、ダンス、演劇という現代舞台芸術のためのわが国唯一の国立劇場として、1997年10月に開場した。新国立劇場合唱団も年間を通じて行われる数多くのオペラ公演の核を担う合唱団として活動を開始。個々のメンバーは高水準の歌唱力と演技力を有しており、合唱団としての優れたアンサンブル能力と豊かな声量は、国内外の共演者およびメディアからも高い評価を得ている。

コラム

マクベスを惑わせた言葉とは———

第1幕、森の中。魔女たちがマクベスに呼びかける。

「幸あれ　マクベス グラミスの領主!」
「幸あれ　マクベス コーダーの領主!」
「幸あれ　マクベス スコットランド王!」

続いて魔女たちはバンクォーに語りかける。

「マクベスに勝るとも劣らぬ栄光!」
「幸福は より大きいだろう」
「歴代の王の親となるだろう」

——これを聞いたマクベスは動揺する。

第3幕、再び森。魔女たちが呼び寄せた幻影がマクベスに語りかける。

「マクダフに気をつけろ」
「残忍になるがいい。女から産まれ落ちた者は　お前を倒せない」
「心を強く持つがいい。バーナムの森が攻めてくるまで　お前は無敵だ」

しかし「バンクォーの子孫が王座につくのか？」というマクベスの問いに、魔女たちは答えない。マクベスは破滅へと向かっていく。

楽曲紹介

解説＝小畑恒夫

ヴェルディ
歌劇『マクベス』

■作品の成立背景

オペラ『マクベス』（1847）はジュゼッペ・ヴェルディ（1813-1901）の作品としては初期に属するが、『ナブッコ』（1842）や『エルナーニ』（1844）とともに例外的な傑作とされる。『マクベス』は若きヴェルディが敬愛するシェイクスピア作品に初めて挑んだ成果だった。音楽の構想と斬新さは当時の常識をくつがえすもので、その意味では晩年の傑作『オテロ』にも匹敵する。ここでは作品の成立過程を見ておこう。

『ナブッコ』で大成功を収めたヴェルディのもとにはオペラの注文が殺到した。ヴェルディは北イタリアのみならず、遠いナポリやロンドンの劇場とも契約して多忙な作曲活動を展開するが、9作目の『アッティラ』（1846）でついに過労に倒れ、医師から6カ月の完全休養を命じられた。ヴェルディはレコアーロへ温泉治療に行くなど数カ月は作曲から離れる。しかしこの時期にドイツ、フランス、英国の最新の文学事情を仕入れ、読書に多くの時間を費やしたことは、オペラに新しい題材を求めていたヴェルディに豊かな実りをもたらした。

そこへフィレンツェの興行師ラナーリから新作オペラの依頼が来た。契約歌手のなかに一級のテノールがいないことを知ったヴェルディは、手持ちの題材の中からシェイクスピアの『マクベス』を選んだ。なぜなら題名役がバリトンにふさわしい。さらに興行師ラナーリは衣装と舞台装置の工房も経営していたので、シェイクスピアらしい舞台が実現できると考えたようだ。

ヴェルディは当時のイタリアではまだあまり理解されていなかったシェイクスピアに熱中し、その作品を熟読していた。彼は作品のよさが損なわれないよう自分でオペラ台本の構想を練り、気心の知れた詩人ピアーヴェに韻文台本を依頼した。さらにピアーヴェにシェイクスピアの演劇的効果を説明し、力のある言葉を選んで書いてほしいと再三書き直しを命じている。

オペラは1847年3月14日にフィレンツェのペルゴラ劇場で初演された。当時としては異色の内容であったにもかかわらず、『マクベス』は大きな成功を収めた。ちなみにヴェルディは、1865年にリリック座でパリ初演が行われる際にこのオペラをフランス風に改訂した。本日の公演はこの改訂版からバレエを除いたものである。

■あらすじ

スコットランドの武将マクベスは森の中で魔女たちから「将来国王になる」と予言される。マクベスは権勢欲にとりつかれた夫人と共謀し、自分の手で国王を殺して王冠を手に入れる。しかし予言は一緒にいた武将バンクォーにも「子孫が国王になる」と語っていた。禍根を断つためにマクベスはバンクォー父子の暗殺を企む。子どもは打ち損じるが、犯行直後、マクベスは血まみれのバンクォーの亡霊を見て動転し、宮廷で大失態を演じる。不安に駆られたマクベスは再び魔女に未来を尋ね、新たな予言に翻弄される。王座を守るために彼は政敵の殺戮を繰り返す。人心は離れ、国は荒れたが、もはや後戻りできない。亡命していた王子マルコムと武将マクダフがイングランドの援助をうけて反旗を翻した。王宮ではマクベス夫人が良心の呵責から夢遊病になり、衰弱して死んでしまう。残されたマクベスは反乱軍を迎え撃つも、戦場で命運が尽きる。

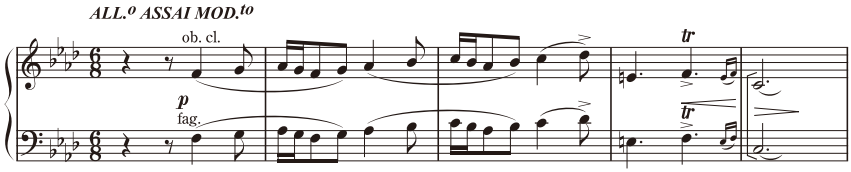
パリ、リリック劇場での『マクベス』1865年改訂版のスケッチより（第1幕第2場）

■楽曲解説

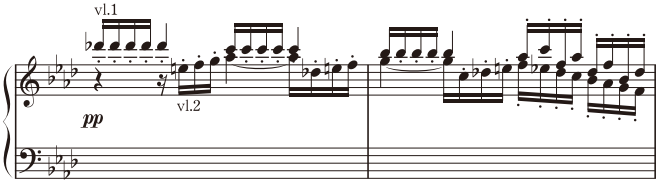
第1曲　前奏曲

短い前奏曲はオペラの主題に基づく。木管楽器のユニゾンによる素朴なメロディ【**譜例1**】は第3幕冒頭の魔女の出現場面から、オーケストラの劇的な全奏は同幕の亡霊出現からとられている。この序奏に続く音楽は、第4幕マクベス夫人の「夢遊の場」のメロディ【**譜例2a & 2b**】を交響的に発展させたもの。悲劇的な曲調はこの運命的なドラマへの導入にふさわしい。

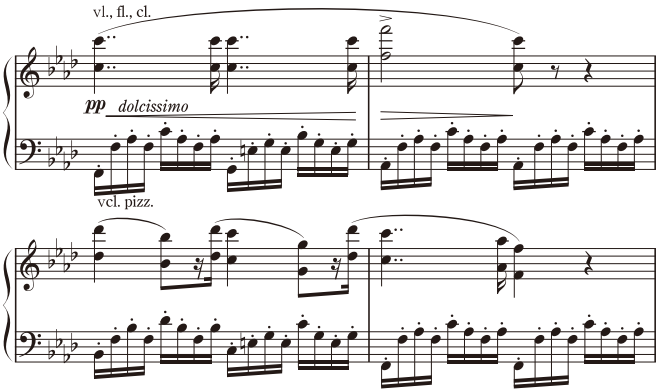
【**譜例1**】



【**譜例2a**】



【**譜例2b**】



第1幕

第2曲　導入曲

スコットランドの森の中。魔女たちが陽気に騒いでいる［**合唱**］。将軍マクベスとバンクォーが通りかかると、魔女たちは――オーケストラの不気味な響きを背景に――それぞれに3つの謎めいた言葉をかける。彼女たちは、マクベスをグラーミスの領主と言い当て、彼がやがてコーダの領主になり、さらにスコットランドの王になると予言する。一方バンクォーには、子孫が王になると言う。そこへ突然王の使者が登場し「コーダの領主が反逆罪で斬首され、領地はマクベスに託された」と伝える。魔女は未来を言い当てられるのか？ 2人の将軍は複雑な思いを独白する［**小二重唱**］。マクベスたちが去ると、魔女は再び陽気に騒ぎながら消える［**合唱**］。

第3曲　マクベス夫人のカヴァティーナ[注1]

城を守っていたマクベス夫人は、魔女の予言を知らせる夫からの手紙を読む。夫人の心には王座への野望が燃え上がる。夫に決断を迫ろうと歌うカヴァティーナ「**さあ早く戻っていらっしゃい**」は強烈なエネルギーに満ちている。使者が今夜マクベスとダンカン王が城に泊まることを告げると、夫人は狂喜してカバレッタ[注2]「**地獄を治める者たちよ、立ち上がれ**」を歌う。広い音域をアジリタ[注3]で駆けめぐる技巧的な曲で、権勢欲にとりつかれた夫人の精神状態が示される。

第4曲　レチタティーヴォと行進曲

夫人は帰城した夫に国王暗殺をそそのかす（夫妻の会話はレチタティーヴォ）。バンダが行進曲を演奏し、国王（黙役）の到着と人々の歓迎を暗示する。

第5曲　シェーナ[注4]とマクベス夫妻の二重唱

夜、マクベスは短剣の幻を見る。シェーナ「**俺の前に短剣が！**」は国王殺害を決断するモノローグで、音楽は創意工夫に満ちた劇的なもの。夫人が首尾を案じていると、王の寝室から血まみれの短刀を手にしたマクベスが震えながら出てくる。二重唱「**宿命の妻よ**」は恐怖に震える夫と彼を必死に励ます夫人の緊迫した会話。気丈な夫人は血まみれの短剣を死体のそばへ戻しに行く。二重唱は急速なカバレッタ「**別の場所へ行きましょう**」に入り、マクベスは夫人に引きずられるように退場する。

第6曲　第1幕フィナーレ

マクダフとバンクォーが登場。王の寝室に入ったマクダフが惨事を発見し、皆を

呼び集めて王の暗殺を伝える。驚き恐れる全員によるコンチェルタート[注5]「**地獄よ、口を開けろ**」は、無伴奏のパッセージを含み、フィナーレにふさわしい壮大な効果を上げる。

第2幕

第7曲　シェーナとマクベス夫人のアリア

王子マルコムは危険を感じて逃亡し、王冠はマクベスに託された。王になるという予言は成就したが、まだ「バンクォーの子孫が王になる」という予言がある。マクベス夫妻はバンクォー父子の殺害を決意する。夫人のアリア「**光は衰え、灯火も消え**」は自由な形式で書かれ、半音階技法を多用して彼女の邪悪な思いを強調する。

第8曲　刺客の合唱／バンクォーのシェーナ

闇の中でバンクォー父子を待ち伏せる刺客たちの合唱。バンクォーは不吉な雰囲気を感じながらロマンツァ[注6]「**空から闇が降りてくるようだ**」を歌う。刺客たちが父子を襲うが、息子（黙役）は逃がしてしまう。

第9曲　祝宴、幻影、第2幕フィナーレ

城の広間。臣下たちを集めた華やかな祝宴が進行する。夫人が「**杯を満たしましょう**」と乾杯の音頭を取る。刺客の一人が広間の隅にマクベスを呼び、バンクォー殺害と息子を取り逃がしたことを報告する。自席に戻ろうとしたマクベスは、そこに血まみれのバンクォーの幻影を見る。彼は錯乱し、「**あの亡霊は俺の血を求めている**」と叫ぶ。ここからフィナーレのコンチェルタートが始まる。夫人は場を繕おうとするが、恐怖におののき錯乱する国王の様子に、臣下たちの忠誠心は揺らぐ。

第3幕

第10曲　魔女の合唱

暗い洞窟。嵐を描写するオーケストラに続き、大釜の周りで魔女たちが「**盛りのついた雌猫が三度鳴く**」と合唱する。この後のバレエ音楽は本公演では演奏されない。

第11曲　レチタティーヴォ、幻影、ダンス曲、フィナーレの二重唱

マクベスが登場し、自分の運命を教えてくれと頼む。魔女は幻影たちを呼び出して語らせる――「マクダフに気をつけろ」「女から生まれた者はお前を傷つけら

れぬ」「バーナムの森が向かって来ぬ限り無敗」。この予言にマクベスは喜ぶ。しかし「バンクォーの子孫は王になるのか」と尋ねると、魔女たちは歴代8人の王が行進する幻影を見せ、マクベスの王位が断絶することを示す（本公演では王たちの行進はカットされる）。マクベスは恐怖のあまり気絶する。この「幻影の場」は明確なかたちを持たず、ドラマにふさわしい断片的な音楽が効果的に使われる。精霊たちがマクベスを慰めるように踊り、魔女たちが静かな合唱を歌う。魔界が消えるとマクベスが目を覚まし、彼を探しに来た夫人との二重唱「**今こそ復讐の時**」になる。夫妻はマクダフの家系を滅ぼし、バンクォーの息子を殺すことを決意する。

第4幕

第12 曲　合唱

イングランドとスコットランドの国境付近の荒野。集まった難民たちが「**虐げられた祖国よ！**」と暴政によって乱れたスコットランドの惨状を嘆く。この極めて繊細な合唱はヴェルディが書いた最高の合唱の一つとされる。

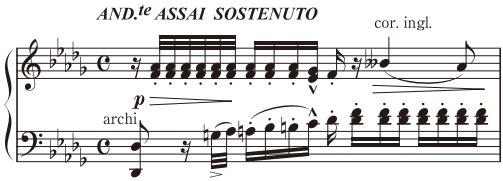
第13 曲　シェーナとマクダフのアリア

アリア「**ああ、父の手はお前たちを守ってやれなかった**」は、祖国に残した妻と息子たちを殺されたマクダフの悲痛な歌。そこへイングランドの援助を得た王子マルコムが軍隊を率いて到着する。祖国奪還に動く王子にマクダフは忠誠を誓う。ここではカバレッタに代えて勇壮な合唱「**裏切られた祖国が泣いて我らを招く**」が歌われる。

第14曲　マクベス夫人の夢遊の場

前奏曲で聞いた2つのメロディ**【譜例2a & 2b】**が再現される。罪の意識に苦しむマクベス夫人は夢遊病になって夜の城内を歩き回っていた。侍女と医者が隠れていると、ロウソクの火を手に夫人が現われる。「**まだここに血の染みがひとつ**」で始まる夫人のモノローグは、初期ヴェルディの最高のアリアと言っても過言

【譜例3】



ではない。アリアはオーケストラの不気味な音型に支えられる**【譜例3】**。医者は夫人の断片的な独白から、彼女がダンカン王殺害にかかわったことを確信する。

第15曲　シェーナ、戦い、フィナーレの賛歌

マルコムがイングランドと結託して攻めて来ると知らされてマクベスは激怒する。しかし彼の唯一のロマンツァ「**哀れみも、名誉も、愛も**」には予想される不幸な余生への悲哀の感情がある。そこへ夫人の死が伝えられ、さらにバーナムの森が動き始めたとの報告が届く。マクベスは覚悟を決め、軍勢を率いてマルコム軍を迎え撃つ。戦いの間、オーケストラはフーガ風の戦闘音楽を演奏する。戦場でマクダフと一騎打ちになったマクベスは、「女から生まれた」のではなく「帝王切開で引き出された」マクダフに斬り殺される。王冠はマルコムに託された。人々は「**マクベスはどこだ、あの王位簒奪者は?**」で始まる壮大な「勝利の賛歌」を歌う。

[注1]カヴァティーナ：登場人物が最初に歌う「登場のアリア」。
[注2]カバレッタ：二部構成のアリアの後半部。速いテンポで歌唱技巧を聞かせる。
[注3]アジリタ：細かい音符の連なりを急速に歌う技巧。
[注4]シェーナ：レチタティーヴォよりも情感豊かに歌う部分。
[注5]コンチェルタート：ソリストたちのアンサンブルで合唱を含む。
[注6]ロマンツァ：アリアのような形式をもたない自由な独唱曲。

[原作]ウィリアム·シェイクスピア『マクベス』
[台本]フランチェスコ·マリア·ピアーヴェ、アンドレア·マッフェイ
[作曲年代]1846～47年　**[初演]**1847年3月14日、フィレンツェ、ペルゴラ劇場にて、作曲者自身の指揮による　**[改訂版初演]**1865年4月21日、パリ、リリック劇場にて
[楽器編成]ピッコロ、フルート、オーボエ2（2番はイングリッシュ·ホルン持ち替え）、クラリネット2、ファゴット2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン3、チンバッソ、ティンパニ、打楽器（小太鼓、大太鼓、シンバル、タム·タム）、ハープ、弦楽5部
[バンダ]オーボエ、クラリネット、ファゴット、トランペット、打楽器（本公演では舞台上のオーケストラ奏者が演奏する）

おばた·つねお／昭和音楽大学客員教授、NPO日本ヴェルディ協会理事長。「音楽の友」「レコード芸術」などで音楽評論活動を展開。著書に『ヴェルディ（作曲家·人と作品）』『ヴェルディのプリマ·ドンナたち　ヒロインから知るオペラ全26作品』『つながりと流れがよくわかる 西洋音楽の歴史』（共著）、訳書にニコラーオ『ロッシーニ 仮面の男』など。

シェイクスピア『マクベス』によせて
Anecdotes on *Macbeth*

作曲家ジュゼッペ・ヴェルディの書簡より

「この悲劇（《マクベス》）は、人間のもっとも偉大な創造物のひとつです！傑作は作れないまでも、せめてありきたりでないものを作りましょう」（台本作家ピアーヴェにあてて）

「《マクベス》はすばらしいものになるでしょう。そう思うと興奮します[…]。このオペラはイタリア音楽に新しい傾向を打ち出し、現在と将来の作曲家たちに新しい道を拓くことでしょう」（興行主ラナーリにあてて）

小畑恒夫「作曲家◎人と作品シリーズ　ヴェルディ」（音楽之友社）より

特別対談　松岡和子×小畑恒夫
〈ヴェルディ／歌劇『マクベス』を知る〉　より

「オペラを従来の形ではなく全てを総合した音楽ドラマにしたいと考えたのは、ヴェルディのこの『マクベス』が最初です。その意味でこの作品はやはり特殊な作品で、これを書いたか書いていないかで後のヴェルディは大きく違ったという感じがします」

（音楽学者・音楽評論家／日本ヴェルディ協会理事長　小畑恒夫　談）

「私はシェイクスピアの戯曲を37本全て訳してきましたけれど、『マクベス』は一番好きかもしれない。まず言葉がとても特別なのですね。どの一行も厳選され、そこにすごいイメージが乗っていて、そういう言葉で作られた人格、性格というのがびっくりするくらい面白い。

マクベスが宴の前に独白する『一旦手をつけた悪事の土台を固めるには悪事を重ねるしかない』――つまり「もう後戻りできないところに行ってしまった」、これが私はこの夫妻の最大の悲劇だと思うのです。取り返しのつかないことをやってしまった、もう先へ行くしかないのだという、これは、たとえ王位に関心がない、人を殺したこともない私でもやっぱり共感できるところがあるのです」（翻訳家・演劇評論家　松岡和子　談）

▶両氏の対談は東京フィルYouTubeチャンネルでご覧いただけます

Message from Maestro Myung-Whun Chung

The theme of *Macbeth* is a very harsh theme we see in the history of power, and desire for power. It is a very uncomfortable drama in that way, but you know, not everything in life can be just happiness and sunshine. This one is highly dramatic on the dark side.

Of course this completes the three Verdi-Shakespeare operas that we've presented. It's in reverse order from the last, but I think it's a very good project that we undertook.

Macbeth is a much earlier work of Verdi, but I think he himself felt that it was his best work of his early period. Twenty years later, he revised a lot of it, so it is both an early work, but also refined in old age.

It is also a big picture of his life as a composer. It is very interesting to follow the development of his musical life through these three operas.

The 1004th Orchard Hall Subscription Concert
Sun. Sep. 15, 2024, 15:00 at Bunkamura Orchard Hall

The 1005th Suntory Subscription Concert
Tue. Sep. 17, 2024, 19:00 at Suntory Hall

The 164th Tokyo Opera City Subscription Concert
Thu. Sep. 19, 2024, 19:00 at Tokyo Opera City Concert Hall

Myung-Whun Chung, conductor

Sebastian Catana, Macbeth (baritone)
Vittoria Yeo, Lady Macbeth (soprano)
Albert Pesendorfer, Banquo (bass)*
Stefano Secco, Macduff (tenor)
Keiroh Ohara, Malcolm (tenor)
Yuka Tajima, Lady-in-Waiting to Lady Macbeth (mezzo-soprano)
Takayuki Ito, A Doctor (bass)
Yuichiro Ichikawa, Servant of Macbeth/Murderer/Herald (baritone)
Ryusuke Yamamoto, Apparition 1 (baritone)
Rumi Kitahara, Apparition 2 (soprano)
Momoko Yoshida, Apparition 3 (soprano)
New National Theatre Chorus (Kyohei Tomihira, chorusmaster)
Kaoru Kondo, concertmaster

Hiroshi Koizumi / Moto Kondo (Art Creation), stage managers
Kizuku Odahara / Motohiro Horii (Art Creation), assistant stage managers
Takashi Kitamura (Gekikosha), lighting
Olfeo, sound
Tokyo Isho, costume
Cho Young, hair & make-up
Art Creation, properties
Asako Honya, surtitles
Nana Shioya (Zimaku Plus), surtitles operation

Yasuko Furuse / Marin Yamanaka, musical preparation
Mari Murakami, Italian-Japanese interpreter

*The originally scheduled bass singer, Mr. Alex Esposito, has become unavailable to sing the role of Banquo due to his personal circumstances.

Opera in Concert Style

Verdi: Opera *Macbeth*

(the Paris version of 1865, Ricordi)

Concert-Style Opera in four acts with Japanese surtitles
Libretto by Francesco Maria Piave and Andrea Maffei
from William Shakespeare's *Macbeth*

ACT 1 (ca. 50 min)

ACT 2 (ca. 30 min)

— intermission (ca. 20 min) —

ACT 3 (ca. 20 min)

ACT 4 (ca. 40 min)

Performance time: ca. 2 hours and 45 minutes (including intermission)

15 Sep
17 Sep
19 Sep

Presented by the Tokyo Philharmonic Orchestra
Subsidized by the Agency for Cultural Affairs Government of Japan | Japan Arts Council,
the Mitsubishi UFJ Trust Foundation for the Arts (Sep. 17),
Affinis Arts Foundation
Supported by the Verdi Society of Japan, the Shakespeare Society of Japan
In Association with Bunkamura (Sep. 15)

♪ All seats are reserved. Late admittance will be refused during the live performance. If you enter or reenter just before the concert or between movements, we may escort you to a seat different from the one to which you were originally assigned.
♪ Exiting during the performance will be tolerated. If you do not feel well, please exit or enter as you need. However, please mind the other listeners so that they will be minimally disturbed.
♪ Please refrain from using your cellphone or other electronic devices during performance.
♪ Please cherish the "afterglow" at the end of each piece for a moment before your applause.

Artists Profile

©Takafumi Ueno

Myung-Whun Chung,
conductor

Honorary Music Director of
the Tokyo Philharmonic Orchestra

15 Sep
17 Sep
19 Sep

Born in Seoul, Myung-Whun Chung won the silver medal at the Tchaikovsky International Piano Competition in 1974. After completing conducting studies at the Juilliard School, he served as assistant and subsequently associate conductor to Carlo Maria Giulini at the Los Angeles Philharmonic. Since his appointment as Music Director of the Paris Opera (L'Opéra Bastille) in 1989, Maestro Chung has conducted many prominent orchestras, including the Vienna Philharmonic, the Berlin Philharmonic, and la Filarmonica della Scala. He served as the Music Director of l'Orchestre Philharmonique de Radio France (2000- 2015), the Seoul Philharmonic Orchestra (2006-2015) and the Asia Philharmonic Orchestra, which he founded in 1997. Since 2012, he has been Principal Guest Conductor of the Staatskapelle Dresden. In June 2022, he received the title of Grand Officer of the Order of Merit of the Republic of Italy for his contributions to Italian cultural development over the years. In March 2023, he became the first-ever Conductor Emeritus of the Filarmonica della Scala in Milan.

For the TPO, Maestro Chung was Special Artistic Advisor (2001- 2010), its Honorary Conductor Laureate (2010-2016). Starting September 2016, he was appointed as Honorary Music Director. He is active in education for the younger generations and in promotion of peace especially in Asia through a variety of musical activities and serving as UNICEF Ambassador.

Sebastian Catana,
Macbeth (baritone)

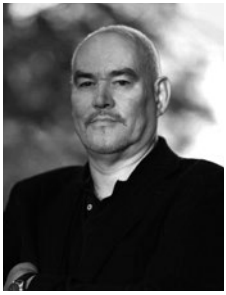
Born in Cluj, Romania, Sebastian Catana is emerging as a prominent Verdi and verismo baritone of his generation. He made his operatic debut in 2001 as Thore in *Les Huguenots* at Carnegie Hall with the Opera Orchestra of New York. In 2003, he debuted at the Metropolitan Opera as Schaunard in *La Bohème* under the baton of Daniel Oren and later performed as Valentin in *Faust*. His European debut came in 2007 as Paolo in *Simon Boccanegra* at Teatro Comunale in Bologna. Catana has interpreted many major Verdi baritone roles, and his career continues to thrive with a series of significant engagements. He has performed Scarpia in *Tosca* at Opera Bastille, Alfio in *La cavalleria rusticana* in Verona, Cagliari, and Barnaba in *La Gioconda*. He has also performed *Tosca* in Venezia (Teatro La Fenice), Rome (Teatro dell'Opera), Palermo, and Tokyo (tournée del Teatro Massimo Palermo with Angela Gheorghiu); *I Due Foscari* in Amsterdam Concertgebouw, Santiago de Chile, Trieste and Toulouse; *Luisa Miller* in Torino e Lyon; *Nabucco* in Stuttgart, Rome (Caracalla) and Philadelphia Opera; *Rigoletto* in Rome (Teatro dell'Opera) and Copenhagen, and *Giovanni* in the European premiere of Tutino's *La Ciociara* in Cagliari. Recently acclaimed roles include Germont in a new production at the Israeli Opera in Tel Aviv and Santiago del Chile, Rigoletto in Liège, and Falstaff in Tokyo. Upcoming roles include Amonasro at Arena di Verona, Nabucco at Teatro Colón, and Macbeth in Cagliari and Tokyo with Myung Whun Chung. He will return to the Arena di Verona Festival, singing Alfio, Tonio, Nabucco, and Amonasro. Additionally, Catana will reprise roles such as Nabucco and Tosca in Copenhagen, Trovatore and Otello in Tel Aviv, Alfio and Tonio at Pittsburgh Opera, and will debut Simon Boccanegra in Warsaw (Polish National Opera).

15 Sep
17 Sep
19 Sep

©Sergio Ferri

Vittoria Yeo,
Lady Macbeth (soprano)

Vittoria Yeo was born in Seoul, South Korea, where she began her musical studies and earned a degree in vocal performance from Seokyeong University. She then moved to Italy to continue her training, receiving her diploma in vocal performance from the "Arrigo Boito" Conservatory of Music in Parma. She furthered her studies at the Accademia Chigiana in Siena and the Istituto Musicale Pareggiato "Vecchi-Tonelli" in Modena, studying under the celebrated soprano Raina Kabaivanska, and graduated with the highest honors. Yeo began her international career in 2015 with her debut at the Salzburg Festival, where she performed as Elvira in *Ernani* under the direction of Riccardo Muti. She later sang the title role in a new production of *Aida* at the same festival in 2017. Yeo's repertoire includes roles such as Lady Macbeth in *Macbeth*, Cio-Cio-San in *Madama Butterfly*, Fiordiligi in *Così fan tutte*, Liù in *Turandot*, Leonora in *Il trovatore*, Giovanna in *Giovanna d'Arco*, Odabella in *Attila*, Mimì in *La bohème*, Lida in *La battaglia di Legnano*, Amelia in *Simon Boccanegra*, Aida in *Aida*, Norma in *Norma*, and Desdemona in *Otello*. She has also performed as a soloist in Mozart's *Requiem* at the Arena di Verona (2020) and in Verdi's *Messa da Requiem* under the baton of Riccardo Muti with the Chicago Symphony Orchestra (2018), the Berliner Philharmoniker at the Baden-Baden Festival (2019), and with the Orchestra and Chorus of Teatro Real in Madrid at the Cathedral de Burgos in Spain (2022).



Albert Pesendorfer,
Banquo (bass)

Austrian bass Albert Pesendorfer is highly sought after for his performances in the German repertoire, having sung at major theaters and festivals worldwide. His versatility extends to Italian and Slavic roles, earning him widespread acclaim. In 2016 and 2017 he appeared as Hunding in *Walküre* and Hagen in *Götterdämmerung* at the New National Theatre in Tokyo. Highlights of his 2024-2025 season include performing Banquo in Verdi's *Macbeth* with the Tokyo Philharmonic Orchestra, Hunding in *Die Walküre* at the Teatro Comunale in Bologna, Baron Ochs in *Der Rosenkavalier* with the Tokyo Symphony Orchestra, and roles such as Graf Waldner in *Arabella* and Veit Pogner in *Die Meistersinger von Nürnberg* at the Deutsche Oper Berlin. Pesendorfer's operatic repertoire encompasses over 70 roles, predominantly in the German Wagnerian tradition, including Hans Sachs, Veit Pogner, Landgraf Hermann, Gurnemanz, König Heinrich, König Marke, Fasolt, Hunding, and Hagen. He also excels in the Italian repertoire, performing roles such as Filippo II, Zaccaria, Sparafucile, and Banquo. On the concert stage, Pesendorfer has appeared at prestigious venues such as the Vienna Musikverein, the Vienna Konzerthaus, the Berlin Philharmonie, and the Barbican Hall in London, as well as in Japan and the USA. Additionally, he serves as a professor of voice at the Berlin University of the Arts.

Stefano Secco,
Macduff (tenor)

Born in Milan, Stefano Secco studied piano and singing under Alberto Soresina and further trained with renowned artists Franco Corelli, Franca Mattiucci, Leyla Gencer, and Renata Scotto. He has performed in all the major Italian opera houses, with notable roles including Rodolfo in *La bohème* in Bologna, Parma, and Rome; the Duke of Mantua in *Rigoletto* in Turin and Florence; Pinkerton in *Madama Butterfly* in Rome; Osiride in *Mosè in Egitto* in Verona; Cavaradossi in *Tosca* at the Torre del Lago Festival; and Alfredo in *La traviata* and Macduff in *Macbeth* at La Scala, Milan. Recent engagements include *Werther* and *Tosca* at the Vienna Staatsoper; *Lucia di Lammermoor* in Salerno; *Macbeth* and *Traviata* in Venice; *Macbeth* and *Rigoletto* in Cagliari; a New Year's Gala with the Teatro alla Scala in Milan in Algiers; *Un ballo in maschera* in Nantes and Rennes; *I Masnadieri* in Valencia; *Faust* in Nice; Rossini's *Stabat Mater* in Trieste; *La Bohème* in Bari; *Luisa Miller* in Marseille; *Stiffelio* in Strasbourg, Mulhouse, and Dijon; Dallapiccola's *Il Prigioniero* (as Grande Inquisitore) with the London Symphony Orchestra under the direction of Pappano; the world premiere of the orchestral version of Puccini's *Romanze* (orchestrated by Marco Quagliarini) with the Orchestra di Padova e del Veneto; *Tosca* and *Norma* in Messina; and *I Vespri Siciliani* at the Teatro Comunale in Bologna.

Keiroh Ohara,
Malcolm (tenor)

Keiroh Ohara graduated from Tokyo University of the Arts, where he completed his graduate studies and earned a doctorate. He has appeared in various roles at the New National Theatre, including Rodrigo in *Chinmoku* and Edmund in *Lear* at Nissay Theatre. His powerful performance as Florestan in *Fidelio* at the ROHM Theatre Kyoto and Nikikai Opera garnered acclaim, as did his delicate portrayal of Yohyou in *Yuzuru* at the New National Theatre. Ohara has been active both in Japan and internationally, participating in the "Year of Japan in Russia" organized by the Ministry of Foreign Affairs and performing at the Mariinsky Theatre. He also received praise for his portrayal of the title role in *Lohengrin* in productions by Nikikai Opera and Biwako Hall. On the concert stage, he performs a wide range of repertoire from classical to contemporary works. He is a member of Nikikai.

15 Sep
17 Sep
19 Sep

©FUKAYA Yoshinobu/auraY2

Yuka Tajima,
Lady-in-Waiting to Lady Macbeth (mezzo-soprano)

Yuka Tajima graduated from Musashino Academia Musicae and completed its graduate program. She was a finalist at the 50th Italy-Japan Vocal Music Concorso and won first prize at the 31st Iizuka Newcomer Music Competition. Since her debut with Fujiwara Opera Company as Tisbe in *La Cenerentola*, she has performed various roles, including Pippo in *La Gazza Ladra*, Charlotte in *Dialogues of the Carmelites*, Berta in *The Barber of Seville*, Clotilde in *Norma*, and Suzuki in *Madama Butterfly*. In 2018, she made her role debut as Angelina in *La Cenerentola*, receiving great acclaim. She has also appeared as Hermia in *A Midsummer Night's Dream*, Suzuki in *Madama Butterfly*, and Mercedes in *Carmen* at the New National Theatre, Tokyo. Tajima has performed as a soloist in religious works such as Beethoven's *Ninth Symphony*, Mozart's *Requiem*, and the *Coronation Mass*. She is a member of the Fujiwara Opera Company.

Takayuki Ito,
A Doctor (bass)

Graduated from Nagoya University of Arts with honor, and completed its graduate course as well. He continued his studies in Milan, Italy. His awards include the 39th Italian Vocal Concorso Gold Prize and 2nd Prize at the G. Zecca International Vocal Competition among many. While in Milan, he performed in various operas including *La Bohème* as Colline. He also reeceived favorable reviews for his performances at the New National Theatre in Tokyo in *Aida* (King) and *Tales of Hoffmann* (Luther/Krespel), and at the Nissay Theatre in *The Barber of Seville* (Basilio), *Faust* (Mephistopheles) by Fujiwara Opera Company etc. and has performed as soloist in Beethoven Ninth Symphony, Verdi and Mozart Requiem etc. He received the Aichi Prefecture Arts and Culture Award "Cultural Newcomer Award" in 2012 and the Toyota Cultural Encouragement Award in 2017. He is a member of Fujiwara Opera Company.

Yuichiro Ichikawa,
Servant of Macbeth/Murderer/Herald (baritone)

Yuichiro Ichikawa graduated from Showa University of Music and completed its graduate course. He performed in concert in Seoul in 2016 as part of an exchange program between Showa University of Music and Seoul National University, and was recommended by M. Devia to perform in the "Opera Aria Concert," a project commissioned by the Agency for Cultural Affairs in 2017 to foster up-and-coming artists of the next generation. Since his debut with Fujiwara Opera Company in 2018 as Dandini in *La Cenerentola*, he has appeared in various roles, including Sharpless in Madama Butterfly, Escamillo in *Carmen*, and Schaunard in *La Bohème*. In 2023, he performed as Emperor Suzaku in *The Tale of Genji* with the Japan Opera Association and sang in *La Bohème* with the Seiji Ozawa Music Academy, where he received high acclaim. He is a member of the Fujiwara Opera Company.

Ryusuke Yamamoto,
Apparition 1 (baritone)

Ryusuke Yamamoto graduated from the Vocal Music Department and Music Major Department of Showa University of Music and completed the Opera Singer Training Program at the Japan Opera Foundation. He has appeared in numerous operas, including *Lucia di Lammermoor*, *La Traviata*, *Rigoletto*, *Un Ballo in Maschera*, *Il Trovatore*, *Aida*, *La Bohème*, *Madama Butterfly*, *Tosca*, and *Pagliacci*. While studying in Italy, he performed in various concerts, primarily in Milan, including roles such as Amonasro in *Aida* and Belcore in *L'elisir d'amore*. Yamamoto has also appeared as a soloist at the Hyogo Prefecture Newcomer Concert and in performances of Mozart's and Duruflé's *Requiem*. He is a member of the Fujiwara Opera Company and the New National Theatre Chorus.

Rumi Kitahara,
Apparition 2 (soprano)

Graduated from Tokyo University of the Arts and completed her graduate studies there. Finished the training program at the Nikikai Opera Institute at the top of her class, after which she further honed her skills in Italy. Kitahara has appeared in numerous operas, including as the Countess in *The Marriage of Figaro*, Mimi in *La Bohème*, one of the Ladies in *The Magic Flute*, and Giorgetta/Angelica in *Il Trittico*. In addition to her opera performances, she has also been active in musicals. In recent years, she has performed in roles such as a Lady in *Macbeth* at the Tokyo Spring Music Festival under the baton of Riccardo Muti, and Fusako in the Nikikai Opera production of *Das verratene Meer*, composed by Hans Werner Henze, where her acting skills also received high praise.

Momoko Yoshida,
Apparition 3 (soprano)

Momoko Yoshida graduated from Kunitachi College of Music, specializing in vocal performance. She performed in the 2013 Graduation Concert and the 36th Yomiuri Chubu Annual Concert for Rookie Musicians. She completed the Nikikai Opera Institute and performed in the concert for New Vocalists of the 60th selected members. Yoshida has appeared in roles such as Cupid in *Orphée aux Enfers,* the Young Shepherd in *Tannhäuser*, and a Boy in *Die Zauberflöte*. In concert settings, she has performed as a soloist in Brahms' *Ein Deutsches Requiem* and at the "STAND UP! CLASSIC FESTIVAL 2023." She is a member of the New National Theatre Chorus.

©Takafumi Ueno

New National Theatre Chorus,
Chorus (Kyohei Tomihira, chorusmaster)

New National Theatre, Tokyo, has opened in October 1997 as the only national theatre for the modern performing arts of Opera, Ballet, Contemporary Dance and Play. Meanwhile, New National Theatre Chorus has started its career and plays a central role in many Opera performances all through the seasons. Their ensemble ability and rich voices achieved acclaim from costarred singers, conductors, directors, stage staffs as well as domestic and foreign media.

15 Sep
17 Sep
19 Sep

Column

The words that misled Macbeth

Act 1, in the forest. The witches call out to Macbeth:

"Hail, Macbeth, Thane of Glamis!"
"Hail, Macbeth, Thane of Cawdor!"
"Hail, Macbeth, King of Scotland!"

Then, the witches address Banquo:

"You will be lesser than Macbeth and yet greater!"
"Not so happy as he, but happier!"
"Not king, but the father of kings!"

Upon hearing these portentous foretellings, Macbeth is shaken.

Act 3, once again in the forest. Apparitions summoned by the witches speak to Macbeth.

"Beware Macduff."
"You may be bloody and fierce: no man born of woman will harm you."
"Be strong: you will be glorious and invincible
until you see Birnam wood come marching towards you."

But when Macbeth asks, "Will the descendants of Banquo ever mount the throne?" the witches remain silent. Macbeth continues on his path to ruin.

Program Notes

Text by Robert Markow

Verdi: Opera *Macbeth*

Over the span of just eleven years (1839-1850), Verdi turned out fifteen full-length operas – more than one a year. Of these, few remain in the active repertory; in fact, until the great middle period trilogy of *Rigoletto*, *Il trovatore*, and *La traviata*, only *Nabucco* (his third opera) and *Macbeth* (his tenth) can claim repertory status. Indeed, Verdi himself claimed *Macbeth* to be the favorite of his operas up to that time.

Macbeth also represents one of Verdi's manifestations of his lifelong love of Shakespeare. In *Macbeth*, Verdi attempted something new, an overriding concern with the dramatic expressiveness inherent in the text rather than mere vocal display and slavish adherence to the conventions of opera in his day. Verdi's determination that his opera should reflect the dramatic elements of the play, rather than serve as a mere showcase for vocal talent, is seen in his rejection of Tadolini for the role of Lady Macbeth. "Madame Tadolini has a wonderful voice, clear, flexible and strong, while Lady Macbeth's voice should be hard, stifled and dark. Madame Tadolini has an angelic voice, but Lady Macbeth's should be diabolical." Pierluigi Petrobelli, former Director of the Verdi Institute in Parma, sums up Verdi's intentions thus: "*Macbeth* is the culminating and decisive crisis in Verdi's art. It constitutes the moment at which the composer became aware that he had to find within the musical language the elements characterizing the dramatic poles of the action in a way that creates an arc of tension transcending single moments and isolated situations."

Macbeth is unusual in other ways as well. It is one of the few operas with no love interest. There is no leading role for a tenor, and it has few arias in the traditional sense. Most of the best tunes go to the chorus. On the other hand, there is a stirring drinking song, a vengeance duet, a sleepwalking scene, an apparition scene, two mad scenes (one each for Macbeth and Lady Macbeth), and two extended scenes for the witches (expanded from three individuals in Shakespeare to three "covens" of six or more in Verdi) – more than enough to

sustain interest! The cast is quite large, but there are only three leading roles: the title character, his wife (who functions more as a partner in crime than as a lover), and the witches as a collective unit. Macbeth's wife, who may be regarded as the real protagonist of the drama, is the only character in all of Verdi's 26 operas who has no name of her own; she is simply "Lady Macbeth." As for the witches, Verdi wrote that "[they] dominate the drama; everything stems from them – rude and gossipy in Act I, exalted in Act III. they make up a real character, and one of the greatest importance."

In 1846, the year Verdi began to write *Macbeth*, his greatest masterpieces were still ahead of him (*Rigoletto, Il trovatore, La traviata, La forza del destino, Aida, Otello, Falstaff*, among others), but at 33 he was already rich and famous. In that year, opera houses in three major cities – London, Paris, and Naples – were clamoring for his next production. For a libretto, Verdi was considering Grillparzer's *Die Ahnfrau*, which he never set; Schiller's *Die Räuber*, which later became *I masnadieri*; and *Macbeth*, which went to none of the above-mentioned theaters, but rather to La Pergola in Florence. This was to be the first of Verdi's settings of his life-long love of Shakespeare, but he did not return to this author until the very end of his long career (*Otello* in 1887, *Falstaff* in 1893). Verdi's source was the first integral translation of Shakespeare into Italian, by Carlo Rusconi, published in Padua in 1838. This was only a prose rendition, which of course failed to capture the magic of Shakespeare's poetry and sonoric niceties, but that's where the music takes over. Verdi enlisted the services of the librettist Francesco Maria Piave, with whom he had previously worked on *Ernani* and *I due Foscari*, but Verdi initially drew up the entire libretto himself in prose form, choosing which scenes from Shakespeare to include, which to omit, and how to reduce the text to manageable proportions for an opera (less than half of Shakespeare's original). Piave's job was to turn Verdi's text into exact verse for the composer to set to music.

The premiere in Florence on March 14, 1847 was a huge success. Verdi was recalled to the stage 38 times. The opera made the rounds of Italy, went on to other European cities, and arrived in New York in 1858. Ironically, England, the country of Shakespeare's birth, did not see Verdi's *Macbeth* until nearly a century after its premiere, in 1938. In 1865, the French publisher Léon Escudier suggested a new version of *Macbeth* for the Théâtre lyrique in Paris, and Verdi

agreed. It was mandatory at the time that any opera produced in Paris include a ballet sequence, whether the story required one or not, and Verdi grudgingly complied. There were other changes as well, mostly in Act III. Productions today generally respect the Paris version. The ballet scene is usually cut, but the music sometimes turns up at symphony concerts as a self-contained number.

SYNOPSIS

ACT I

A brief Prelude sets the mood of dark mystery and strange goings-on in the story about to unfold. Music later associated with Lady Macbeth – a nervous, jabbing figure in the strings and a haunting, lyrical line presented by violins – appropriately takes prominence, as she is the character who motivates much of the action. The scene is eleventh-century Scotland. Against the background of a storm, witches convene on a desolate heath to brag about the evil deeds they have recently committed. Macbeth and his friend Banquo, both generals in King Duncan's army, approach. The witches hail Macbeth with three titles: Thane of Glamis (a position he already holds), Thane of Cawdor, and King of Scotland. They also hail Banquo as the father of future kings. Both men are astonished at these words, and voice their misgivings over these mysterious pronouncements. A moment later a messenger arrives with the news that the King has just appointed Macbeth Thane of Cawdor after deposing the previous occupant of this post. Macbeth's hair stands on end (so he tells us), as he reflects that the ultimate symbol of power, King of Scotland, a post he had never previously considered, suddenly seems within reach. The witches return for a final chorus.

The scene moves to a hall in Macbeth's castle. Lady Macbeth, at first speaking (not singing), is reading a letter from her husband describing the events of the previous scene. She immediately begins contemplating the murder of King Duncan, who just happens to be arriving at the castle that very evening. With fierce determination, she calls upon the ministers of hell to assist her ("Or tutti sorgete") in her infamous designs. The moment Macbeth arrives she commands him to do the dirty work. Then follows Macbeth's famous soliloquy, taken directly from Shakespeare, in which he imagines a dagger dangling before him in mid-air. His resolve falters, but his wife eggs him on. After killing

Duncan in his sleep, Macbeth is further urged by his wife to erase all possibility of discovery by returning to the King's bedchamber and smearing the guards with blood so that the blame will fall on them, not on Macbeth. Macbeth is too stunned to act, so his wife proceeds apace. When the King is discovered dead the next morning, there is appropriate outcry, confusion, and horror. The act closes with a powerful ensemble.

ACT II

Lady Macbeth is not finished with murderous thoughts. Now she wants Banquo dead, as the witches had prophesized that he would be "father of kings," thus threatening Macbeth's title as King of Scotland. Again, the deed is to be carried out this very night. In a stirring aria ("La luce langue"), she affirms with steely resolve the necessity of further murders and exults in the power she and her husband now enjoy.

The scene shifts to a park near Macbeth's castle. A band of assassins converse in a bouncy, light-hearted chorus about their impending murder of Banquo and his son Fleance. Banquo gets his only aria in the opera ("Come dal ciel precipita") just in time before he is dispatched. Fleance escapes.

The famous Banquet Scene is introduced with some of Verdi's most exhilarating music. Macbeth welcomes all to the festive occasion in honor of his coronation, and Lady Macbeth leads the crowd in a drinking song ("Si colmi il calice") to what may well be the opera's most memorable tune. (This is an interpolation by Verdi and Piave; it is not found in Shakespeare.) Suddenly Macbeth imagines the ghost of Banquo before him, and for a moment loses his sanity before all the guests. His wife tries to smooth matters over, and resumes the drinking song, but the ghost returns, and Macbeth has an even longer lapse of sanity. Lady Macbeth berates him for his lack of resolve, and the act closes with another big choral number in which the crowd wonders at Macbeth's strange behavior.

ACT III

Act III consists of a single scene. The witches are holding another convention around their boiling cauldron. They dance about and sing of the grisly ingredients that go into their unholy brew. Macbeth enters, determined to learn more about his future. The witches conjure up apparitions for him:

one warns him of Macduff, another advises him that "no man of woman born" can harm him, a third claims that he has nothing to fear until Birnam wood marches on his castle. Macbeth is relieved: of course every man is born from a woman, and how silly to expect that trees can march, he thinks. A further apparition (omitted in this performance) brings forth a procession of future kings, including Banquo. Macbeth collapses in fear. His wife comes to his side to comfort him, and together they plan still more murders, those of Macduff, all his family, and Banquo's son Fleance.

ACT IV

The final act opens on the border of England and Scotland, where Scottish refugees have gathered to sing a chorus ("Patria oppresa"), whose dignified tone of lamentation brings to mind the analogous "Va pensiero" chorus of Hebrews in *Nabucco.* They are joined by Macduff, whose wife and children have been murdered by Macbeth. Macduff sings of his sorrow in his only aria in the opera, ("Ah, la paterna mano"). Malcolm enters leading a company of British soldiers. He orders each man to cut a branch from a tree in Birnam and take it with him into battle against Macbeth. He and Macduff lead the martial chorus ("La patria tradita") that promises freedom from their oppressor.

A somber prelude introduces Lady Macbeth's famous Sleepwalking Scene, in which she relives the horrors of what she and her husband have done. The baleful sound of the English horn underscores the sense of misery. Verdi regarded this scene and the Act I duet between Macbeth and his wife as the two most important passages in the opera. "If these two numbers fail, then the entire opera will fail," he wrote in a letter to Salvatore Camarano. And these two numbers "must be acted and declaimed, with hollow, muffled voices."

In another room in the castle, Macbeth enters, fuming that Scots and Englishmen have united against him. In his only full-length aria in the opera, he expresses the hopelessness and despair that now plague him ("Pietà, rispetto, amore"), that he will never have the comforts that other men enjoy in their advancing years − honor, respect, love. A woman enters to inform Macbeth that his wife is dead (the cause is not given; one can only assume that she has succumbed to emotional exhaustion), news that barely registers on his benumbed mind. Then comes news that *does* enflame him: Birnam wood is advancing on the castle in the form of each soldier carrying a branch for

disguise.

The opera's final scene takes place on a battlefield, with the English soldiers led by Macduff and Malcolm. Macduff confronts Macbeth in a duel. Macbeth is convinced that he is invincible, relying on the witches' prophecy that no man born of woman can harm him. But Macduff did not have a natural birth – he was ripped from his mother's womb. Macduff runs him through. Malcolm (son of the slain King Duncan) is proclaimed the new king, and all rejoice – a tragedy with a happy ending.

GIUSEPPE VERDI: Born in Le Roncole, Italy, October 10, 1813; died in Milan, January 27, 1901
Original work: William Shakespeare's "Macbeth"
Libretto: Francesco Maria Piave, Andrea Maffei **Work composed**: 1846-1847
World premiere: March 14, 1847 at the Teatro della Pergola in Florence, conducted by the composer **Revised Premiere**: April 21, 1865 at Théâtre Lyrique in Paris
Instrumentation: piccolo, flute, 2 oboes (2nd doubling on English horn), 2 clarinets, 2 bassoons, 4 horns, 2 trumpets, 3 trombones, cimbasso, timpani, percussion (snare drum, bass drum, cymbals, tam-tam), harp, strings
[off-stage instruments] oboes, clarinets, bassoons, trumpets, percussion.
*In this performance, orchestral players on stage will perform.

Formerly a horn player in the Montreal Symphony, **Robert Markow** now writes program notes for numerous orchestras and other musical organizations in North America and Asia. He taught at Montreal's McGill University for many years, has led music tours to several countries, and writes for numerous leading classical music journals.

Season 2024 Upcoming Subscription Concerts

We are pleased to inform dear audience the Tokyo Phil's subscription series. You can select from 3 subscription concerts at Tokyo's top venues, Bunkamura Orchard Hall, Tokyo Opera City Concert Hall, and Suntory Hall. Please join us the ultimate concert experience!

For more details, please access our website! https://www.tpo.or.jp/en/

October

conductor: Daichi Deguchi violin: Moné Hattori

Thu, Oct 17, 2024, 19:00 start
at Suntory Hall

Fri, Oct 18, 2024, 19:00 start
at Tokyo Opera City Concert Hall

Sun, Oct 20, 2024, 15:00 start
at Bunkamura Orchard Hall

Khachatuiran:
Excerpts from *The Valencian widow* suite
Fazil Say:
Violin concerto *1001 Nights in the Harem*
Kodály: Dances of Galánta
Kodály:
Variations on a Hungarian Folksong
The Peacock

Single tickets available

November

conductor: Andrea Battistoni, chief conductor

Wed, Nov 13, 2024, 19:00 start
at Tokyo Opera City Concert Hall

Sun, Nov 17, 2024, 15:00 start
at Bunkamura Orchard Hall

Tue, Nov 19, 2024, 19:00 start
at Suntory Hall

Mahler:
Symphony No. 7 *Nachtmusik*

Single tickets available

Single ticket prices

SS¥15,000 S¥10,000(¥9,000) A¥8,500(¥7,650) B¥7,000(¥6,300)
C¥5,500(¥4,950) ( )=Discount prices for TOKYO PHIL FRIENDS

How to join TOKYO PHIL FRIENDS

⇒ https://www.tpo.or.jp/en/tickets/friends.php

Inquiries about tickets.

Tokyo Phil Ticket Service tel: 03-5353-9522
(weekdays 10:00-18:00, closed on weekends and holidays)

Tokyo Phil WEB Ticket Service https://www.tpo.or.jp/en/

東京フィルだより ― 2024年シーズン今後の定期演奏会

10月定期演奏会

第1006回サントリー定期シリーズ
10月17日(木)19:00 サントリーホール 大ホール
第165回東京オペラシティ定期シリーズ
10月18日(金)19:00 東京オペラシティ コンサートホール
第1007回オーチャード定期演奏会
10月20日(日)15:00 Bunkamuraオーチャードホール

指揮：出口大地
ヴァイオリン：服部百音*

ハチャトゥリアン／
『ヴァレンシアの寡婦』組曲より
ファジル・サイ／
ヴァイオリン協奏曲『ハーレムの千一夜』*
コダーイ／ガランタ舞曲
コダーイ／
ハンガリー民謡『孔雀は飛んだ』による変奏曲

出口大地 ©上野隆文

服部百音 ©YUJI HORI

1回券発売中

11月定期演奏会

第166回東京オペラシティ定期シリーズ
11月13日(水) 19:00 東京オペラシティ コンサートホール
第1008回オーチャード定期演奏会
11月17日(日) 15:00 Bunkamura オーチャードホール
第1009回サントリー定期シリーズ
11月19日(火) 19:00 サントリーホール

指揮：アンドレア・バッティストーニ
(首席指揮者)

マーラー／交響曲第7番『夜の歌』
公演時間：約80分(休憩なし)

アンドレア・バッティストーニ ©上野隆文

1回券発売中

【料金】1回券　SS¥15,000　S¥10,000　A¥8,500　B¥7,000　C¥5,500
※東京フィルフレンズ(年会費無料・随時入会受付中)入会で、定価の10%割引で購入いただけます(SS席を除く)

お申込み・お問合せは
東京フィルチケット
サービスまで

03-5353-9522(10時～18時／発売日を除く土日祝休)
https://www.tpo.or.jp/ (24時間受付・座席選択可)

10月定期演奏会の聴きどころ

2022年に東京フィル定期で日本デビューを飾った俊英、出口大地が東京フィル定期に再び登場します。ハチャトゥリアン、ファジル・サイ、コダーイと、20～21世紀の“中央ヨーロッパで生まれた西洋音楽”プログラムを取り上げるマエストロ。演目について、また東京フィルとの音楽づくりや今後に向けた思いを語ってもらいました。

――マエストロと東京フィルの直近の共演は、2022年7月のデビューに続き、昨年(2023年)末のベートーヴェン『交響曲第9番』でした。その時の想い出も含めつつ、東京フィルとの音楽作りのことなど、教えて頂けますか?

出口　日本のオーケストラの皆さんは数え切れないほど『第九』を演奏していて、隅から隅まで暗譜するほど熟知していますよね。かたや私にとってプロのオーケストラで『第九』を指揮するのはこの時が初めてだったので、オーケストラの皆さんも正直不安があったと思います(笑)。しかしいざリハーサルが始まると、私のような若い指揮者でも、まずはやりたいことに向き合ってみようというスタンスを取ってくださり、大変ありがたかったです。

――私にはわりと、ゆったりと構えた感じのベートーヴェンに聞こえました。

出口　実は、テンポが遅かった、ゆったりとしていた、と仰る方と、推進力があった、若さがあふれていた、と仰る方、一見すると両極端の感想を頂いています。

東京フィルの皆さんはもちろん速いテンポでもすばらしく演奏できるわけです。しかし一方でエンジンが非常に大きくてパワーがあるので、私としてはそのパワーをいかに無理なく響かせるか、『第九』ならば、あれぐらいのテンポ感が、推進力を維持しつつ会場でもっとも効果的に響くのではないか、と感じました。最初のリハーサルではもっと速いテンポを取っていたと思いますが、響きを聴いているうち

に徐々に落ち着いたテンポになっていきました。

その一方で、ここは普段こうやって弾いている、という奏者の皆さんの考えや慣習をうかがうこともできました。解釈について話し合ったり、教えてもらったりすることもたくさんあって、若い指揮者に対してどこか家族のように接してくださいました。指揮者を助けつつ、一緒に音楽を楽しむオーケストラというのは、特に私みたいな若手にとっては、とてもありがたいことです。本当に大好きなオーケストラですね。

2022年12月『第九』特別演奏会より ©上野隆文

——次の10月定期演奏会の曲目は、ご自身の希望も含め、オーケストラと話し合って決められた、ということですが。

出口　そうですね、お互いに意見交換して決めていきました。ハチャトゥリアン『ヴァレンシアの寡婦』組曲は全6曲から3曲を抜粋します。本当はすべて演奏したいくらいなのですが、私がプログラミングすると「演奏会が長い」とご指摘いただく傾向にあり（笑）今回は断腸の思いで抜粋にしました。ハチャトゥリアンを「剣の舞」と『仮面舞踏会』のワルツでしか知らない、という方には、ぜひ聴きに来てほしいです。ハチャトゥリアンの旋律のセンスはどこか昭和歌謡的で、日本人にも染み入る旋律だと思うので。こんな素敵な旋律を書ける作曲家がいたんだと知っていただきたいですね。

コダーイの『ガランタ舞曲』『孔雀変奏曲（ハンガリー民謡『孔雀は飛んだ』による変奏曲）』は、学生時代からよく聴いていました。コダーイについて馴染みのない方も多いかもしれませんが、ハンガリーの民族音楽に根ざした作曲家、民謡収集という多大な功績を持つ研究者、そしてコダーイ・メソッドという音楽教育メソッドの礎となった教育者、そのすべての顔をもちあわせた偉人です。

裏のテーマとしては、コダーイの2曲は、実はどちらも戦争に絡んだ作品です。前者はあらたに徴兵する兵隊を鼓舞する民謡（ヴェルブンコシュ）ですし、後者は第二次世界大戦下で書かれ、変奏主題として使われた民謡『孔雀は飛んだ』は、オスマン帝国の支配下にあったマジャール人たちが自由を求めて歌った旋律でも

あります。特に『孔雀は飛んだ』は現存する最古のハンガリー民謡の一つとも言われており、その自由を求めた太古の旋律が時に激しく時に寂しく、そして最後には力強く変奏されていく様は、まさに古（いにしえ）の時代から続く人間の存在そのものを変奏形式で描いた傑作であり、時空を超えた反戦歌でもあります。

――これからの「夢」などはありますか？

出口　オペラをやりたいですね。ミュージカルなども含め、小さい頃から舞台が好きでした。小説を読むのも好きだったので、オペラという世界を知ったときは、文学と音楽が組み合わさるなんて、こんな幸せなジャンルは他にないと思いました。まだプロの現場で本番を指揮したことがないので、いつかかかわりたいです。なかでもリヒャルト・シュトラウス、ヤナーチェクやブリテンの作品は高度な文学性を感じられ、本当に好きなんですよ。

それと、管弦楽ではモーツァルトなどの古典派、シューベルトの後期、メンデルスゾーンなどの前期ロマン派に特に親近感を感じます。私は細身で、重心も少し高くなりがちなので、重い響きよりは重心の軽い音楽のほうがピッタリくるところがある気がします。水墨画のように音楽を構成する要素が少ない分、その要素に対するアイディアをいかに、どれだけ出していけるのか、というアプローチを色々考えるのが楽しいです。今後積極的に取り組んでいきたいですね。

――10月定期演奏会に向けてお客様へのメッセージを。

出口　コダーイは、「真の芸術は真の民族性に向き合ったところに生まれる」と語りました。ハンガリーに根ざした活動を続けたローカルな音楽家がこれほどの国際的な知名度を残せたということは驚異的で、まさに彼自身の信念を体現した結果といえるでしょう。

その意味で、『ヴァレンシアの寡婦』でスペインを描こうとしてもアルメニアが滲み出てしまうハチャトゥリアン、自身の出身であるトルコ的な要素に根ざした音楽を創るファジル・サイら、一つのアイデンティティに向き合ったからこそ生まれる芸術性も、同時に深く味わえる演奏会になるのではないかと思います。東京フィルのような柔軟性と爆発力を兼ね備えたオーケストラにとっては、ぴったりなレパートリーだと信じています。私自身、この演奏会をとても愉しみにしています。

広瀬大介（音楽学、音楽評論）／1973年生まれ。青山学院大学教授。日本リヒャルト・シュトラウス協会常務理事・事務局長。著書に『オペラ対訳×分析ハンドブック　シュトラウス／楽劇 サロメ』『同／楽劇 エレクトラ』（アルテスパブリッシング）など。『レコード芸術』など各種音楽媒体での評論活動のほか、NHKラジオへの出演、演奏会曲目解説・CDライナーノーツの執筆、オペラ公演・映像の字幕・対訳などを多数手がける。

アンドレア・バッティストーニ、マーラー「交響曲第7番『夜の歌』」を語る①

©上野隆文

取材・文＝八木宏之

東京フィルの首席指揮者に就任するより前の2014年1月に交響曲第1番『巨人』を演奏して以来、第8番（2019年1月）、第5番（2022年9月）と、マーラーの交響曲に取り組んできたアンドレア・バッティストーニ。取り上げるペースは決してはやくはないものの、入念な準備を重ねたうえで演奏されるバッティストーニと東京フィルのマーラーは、常に高い評価を獲得してきた。東京フィルのシェフになって8シーズン目の2024年11月には、『夜の歌』の愛称でも親しまれる交響曲第7番に挑む。マーラーの交響曲のなかでも屈指の難曲として知られ、ほかの交響曲に比べて演奏される機会は少ない第7番だが、緻密な対位法書法と洗練を極めたオーケストレーションは、マーラーの最高傑作と呼ぶに相応しいものだ。マーラー自身が作品について多くを語らなかったことから、多様な解釈の余地があるのも第7番の魅力である。2024年3月定期『カルミナ・ブラーナ』の熱演の興奮冷めやらぬマエストロに、11月の演奏へ向けて、作品観や意気込みを語ってもらった。

――バッティストーニさんは北イタリアのヴェローナのご出身ですが、幼少期にはしばしばご家族でトブラッハ（イタリア語ではドッビアーコ）を訪れていたと伺いました。トブラッハはマーラーゆかりの街として知られていますね。

「私が子供の頃、私たち家族は毎年クリスマスの休暇をオーストリアとの国境に近いトブラッハで過ごしました。トブラッハにはマーラーの晩年の作曲小屋があって、ここで交響曲『大地の歌』と第9番が作曲されました。少年時代の私にとって

マーラーは、毎朝朝食を買いに行くパン屋の前にある銅像の人物でした。私と弟はこの銅像の周りでよく遊んでいましたね。ある日私は、『メガネをかけてマントを羽織っている、この魔法使いみたいな人物は誰なのか』と母に質問してみました。すると母は、『これはグスタフ・マーラーという高名な作曲家の銅像だ』と教えてくれたんです。

私がマーラーの作品に最初に触れたのは、10代のとき、エリアフ・インバルとフランクフルト放送交響楽団による交響曲第1番の録音でした。CDのジャケットにはあの銅像と同じ顔が印刷されていました。初めて聴いたときには、冒頭の弦楽器の不思議な響きに魅了されたのを覚えています。このように、私にとってマーラーは、幼少期のトブラッハの想い出と密接に結びついているんです」

南チロル(北イタリア)に位置するトブラッハ(ドッビアーコ)。リゾート地として知られる
©Luca Lorenzi

トブラッハのグスタフ・マーラー・ハウスの前にあるマーラーの銅像

――その後、マーラーはバッティストーニさんにとって重要な作曲家になっていったのでしょうか？

「私のマーラーに対するアプローチは、ゆっくりと慎重なものだったと思います。マーラーという作曲家はとても複雑で、理解するのには時間が必要だったからです。私と同世代のマーラーに夢中だった指揮者たちの関心は最近ブルックナーへと移ったようなので、私もようやくマーラーに集中的に取り組んでみようかと思ったのでした(笑)」

「交響曲第7番」について

――入念な準備を重ねて少しずつマーラーの交響曲と向き合われてきたバッティストーニさんですが、東京フィルとのマーラーの演奏はいつも大きな成功を収めてきました。次に取り上げられるのは屈指の難曲として知られる第7番です。

夏休みにトブラッハの別荘付近を散歩するマーラー夫妻(1909)。マーラーは1908年～1910年の毎夏をこの地で過ごし、作曲小屋で『大地の歌』、交響曲第9番、交響曲第10番のスケッチを書いた

「東京フィルとはすでに、交響曲第1番、第5番、第8番を演奏してきたので、次はぜひ第7番を演奏したいと思っていました。私は第7番を傑作だと思っているのですが、実際にはマーラーの交響曲のなかでもっとも演奏頻度の低い作品となっています。例えば第6番や第9番と比較しても、第7番はとてもわかりやすい作品ですが、音楽ファンのなかには苦手意識を持っている方も少なくないようです。

第7番のなによりの特徴はストーリーテリングの質の高さであり、とても演劇的な交響曲だと思います。また第7番はマーラーのそれまでのスタイルの集大成のような音楽でもあります。第7番は、第1番から第6番までの交響曲の再現部のようなものだと言えるかもしれません。第7番のあとには、マーラーの音楽言語は変化していきました。

第7番は、第5番、第6番と続いた純器楽交響曲のクライマックスであり、その管弦楽書法は洗練を極めています。また『魔法の不思議な角笛』と関連した初期の交響曲に特徴的な自然への愛着も第7番には見いだすことができます。そして、第8番、『大地の歌』、第9番と続いていく晩年の交響曲を予感させるような要素も含まれています。このように、第7番にはマーラーの交響曲の創作の変遷が全て詰め込まれているのです」

――先ほどバッティストーニさんがおっしゃったように、音楽ファンのなかにはこの交響曲をとっつきにくい作品だと敬遠している人もいますね。

「マーラーの交響曲には相反するふたつの要素が共存していることがしばしばあります。この第7番は高度な対位法書法のもと、音楽は厳格にコントロールされていますが、実際に聴こえてくるのはカオスなのです。そうした違和感が、この交響曲を理解し難いものだと感じさせてしまっているのかもしれません。

東京フィルとのマーラー「交響曲第5番」にて©上野隆文

マーラー自身は第7番について具体的なエピソードをほとんど語っていませんが、私はこの交響曲をとても物語的な作品だと思っています。とりわけ〈**夜曲**〉とタイトルが付けられたふたつの楽章は、ロマン派の文学、

例えばE.T.A.ホフマンの小説の世界を想起させるのです。第7番は私のなかにある演劇的な関心を刺激しますし、この作品の劇的効果を掘り下げていきたいと思っています」

――交響曲第7番は第3楽章のスケルツォを中心としたシンメトリーな構造を持つ点で第5番に似通っていますが、第5番のような暗から明へと至るベートーヴェン的な展開はありませんね。第5楽章はとても明るいフィナーレですが、それまでの4つの楽章と比べて不自然なほど明るいようにも感じられます。

「確かに、この交響曲に英雄的な勝利はありません。作品を支配するのは、おどろおどろしい暗闇です。第6番にもそうした暗さはありますが、それはタイトルの通りとても悲劇的で、そうした悲劇に立ち向かっていくロマンティックなストーリーを見出すこともできるでしょう。一方第7番では、暗闇は美しいものとして完全に受け入れられています。第1楽章にはいくらか暗闇に抗うような部分も聴かれますが、第2楽章から第4楽章では暗闇は魅惑的なものとして描かれているのです。ウィレム・メンゲルベルクは、第2楽章をレンブラントの『夜警』のような音楽だと述べましたが、これは素晴らしいたとえです。第3楽章にはファンタスマゴリアのショーのような幻想的で魅惑的な世界が広がっています。もうひとつの〈夜曲〉である第4楽章では、ギターやマンドリンによってセレナーデが奏でられますが、そこにあるのは交響曲第5番のアダージェットのようなエロティックな愛ではなく、もう少し距離のある冷静さを持った愛なのです。

第5楽章では唐突に夜の世界から昼の世界へと転じます。このフィナーレだけは、『夜の歌』ではなく『朝の歌』と呼ぶべきかもしれません（笑）。私にとって第5楽章は、チロル地方のトブラッハのような街の日曜日の朝のイメージです。教会の鐘の音も聞こえてきます。しかし、その明るさは次第に狂気を帯びた喜びへと発展し、デュオニュソス的なクライマックスへと突き進んでいきます。その終わり方は、空高く舞い上がった鷹が突然落下するような、あるいはマジシャンが自分の下に敷いてあるカーペットを急に抜いてしまったかのような、ショッキングなものです」

<続く>

八木宏之（やぎ・ひろゆき）／1990年東京生まれ。青山学院大学文学部史学科芸術史コース卒業。愛知県立芸術大学大学院音楽研究科博士前期課程（修士：音楽学）およびソルボンヌ大学音楽専門職修士課程修了。2021年春にWebメディア『FREUDE』を立ち上げ、その運営を行う株式会社メディアシオンを設立。クラシック音楽を中心にプログラムノートやライナーノーツを多数執筆するほか、コンサートのプレトークなども積極的に行なっている。

2024シーズン　今後の定期演奏会

2024シーズンの東京フィル定期演奏会10・11月の1回券が好評発売中です。10月は俊英・出口大地とヴァイオリニスト服部百音の東・中欧プログラム、11月は首席指揮者アンドレア・バッティストーニとの待望のマーラー「交響曲第7番『夜の歌』」と、注目のマエストロたちとの聴き逃せない公演が続きます。東京フィルの充実、協奏曲の躍動を引き続きどうぞお楽しみください。

10月

指揮: 出口大地
ヴァイオリン: 服部百音*

第1006回 10月17日(木) 19:00
サントリーホール

第165回 10月18日(金) 19:00
東京オペラシティ コンサートホール

第1007回 10月20日(日) 15:00
Bunkamuraオーチャードホール

ハチャトゥリアン／
『ヴァレンシアの寡婦』組曲より
ファジル・サイ／
ヴァイオリン協奏曲『ハーレムの千一夜』*
コダーイ／ガランタ舞曲
コダーイ／
ハンガリー民謡『孔雀は飛んだ』による変奏曲

1回券発売中

11月

指揮: アンドレア・バッティストーニ
(首席指揮者)

第166回 11月13日(水) 19:00
東京オペラシティ コンサートホール

第1008回 11月17日(日) 15:00
Bunkamuraオーチャードホール

第1009回 11月19日(火) 19:00
サントリーホール

マーラー／交響曲第7番『夜の歌』
公演時間：約80分(休憩なし)

1回券発売中

1回券料金(全席指定・税込)

SS席¥15,000　S席¥10,000(¥9,000)　A席¥8,500(¥7,650)
B席¥7,000(¥6,300)　C席¥5,500(¥4,950)　( )=東京フィルフレンズ料金

お問合せ　東京フィルチケットサービス

Tel 03-5353-9522 (平日10時～18時・土日祝日休／発売日の土日祝は10時～16時)
URL www.tpo.or.jp/ (24時間受付・座席選択可)

詳細はこちら

News & Information

ベートーヴェン『第九』特別演奏会2024　好評発売中!

今年の12/20（金）、12/21（土）、12/22（日）に開催いたしますベートーヴェン『第九』特別演奏会の出演者と楽曲は下記のとおり決定しました。

日時　2024年12月20日（金）19:00開演　東京オペラシティ コンサートホール
2024年12月21日（土）19:00開演　サントリーホール
2024年12月22日（日）15:00開演　Bunkamura オーチャードホール

出演　指揮：ケンショウ・ワタナベ
ソプラノ：吉田珠代　アルト：中島郁子
テノール：清水徹太郎　バリトン：上江隼人
合唱：新国立劇場合唱団（合唱指揮：三澤洋史）

曲目　ベートーヴェン／歌劇『フィデリオ』序曲
ベートーヴェン／交響曲第9番『合唱付』

©Abigel Kralik

© 上野隆文

チケット料金（税込・全席指定）	S席	A席	B席	C席
定価	¥11,000	¥8,800	¥6,600	¥4,400
東京フィルフレンズ／WEB優先料金（10%off）	¥9,900	¥7,920	¥5,940	¥3,960

協賛：ユニアデックス株式会社（12/20）、楽天モバイル株式会社（12/21）、楽天カード株式会社（12/22）　協力：Bunkamura（12/22）

チケット問合せ　東京フィルチケットサービス 03-5353-9522
（平日10:00～18:00／土日祝休／9/21（土）、9/28（土）のみ10:00～16:00）
東京フィル WEBチケットサービス　https://www.tpo.or.jp/

ニューイヤーコンサート2025 ～どこかで出会った、あのメロディ～

日時　2025年1月2日（木）、3日（金）15:00開演　Bunkamuraオーチャードホール

出演　指揮：角田鋼亮　箏：LEO（1月2日）　ヴァイオリン：前田妃奈（1月3日）　司会：朝岡 聡

曲目　J. シュトラウスⅡ／ワルツ『春の声』
宮城道雄、池辺晋一郎／管弦楽のための『春の海』、今野玲央／松風（2日のみ）
マスネ／タイスの瞑想曲、チャイコフスキー／ヴァイオリン協奏曲第1楽章（3日のみ）
お客様の投票で演奏曲が決まる「福袋プログラム」、ラヴェル／ボレロ ほか

角田鋼亮
©Makoto Kamiya

LEO（1月2日）
©Nippon Columbia

前田妃奈（1月3日）
©Taira Tairadate

朝岡 聡

発売日　**最優先**（東京フィル賛助会員・定期会員）9月21日（土）10:00～
※東京フィルチケットサービス お電話のみの受付
優先（東京フィルフレンズ／ MY Bunkamura）9月28日（土）10:00～
※東京フィルチケットサービスは電話のみ、MY Bunkamuraはオンラインのみ
一般発売 10月8日（火）10:00～

チケット料金（税込・全席指定）　S席¥6,900　A席¥5,800　B席¥3,800

チケット問合せ　東京フィルチケットサービス 03-5353-9522
（平日10:00～18:00／土日祝休／9/21（土）、9/28（土）のみ10:00～16:00）
東京フィル WEBチケットサービス　https://www.tpo.or.jp/

提携都市公演　アンドレア・バッティストーニ指揮長岡特別演奏会

日時　11月24日（日）14:00開演（13:15開場）

会場　長岡市立劇場大ホール

指揮　アンドレア・バッティストーニ（首席指揮者）

曲目　マーラー／交響曲第7番『夜の歌』

料金　S席 ¥5,000　A席 ¥3,000

チケット問合せ　長岡リリックホール 0258-29-7715
長岡市立劇場 0258-33-2211

主催・問合せ
（公財）長岡市芸術文化振興財団 事業課
（長岡リリックホール内）0258-29-7715

首席指揮者アンドレア・バッティストーニ
©上野隆文

連携協定ご報告
東京大学先端科学技術研究センター「青少年高野山会議2024」特別演奏会

8月、和歌山県高野町にて、東京フィルが2021年3月より連携協定を結ぶ東京大学先端科学技術研究センターの主催による「青少年高野山会議」が開催され、この会議の一環として8月18日に「高野山大学黎明館」にて東京フィルによる特別演奏会が行われました。

マエストロ角田鋼亮の指揮と東京フィルコンサートマスター近藤薫のもと、J.S.バッハ「G線上のアリア」やラヴェル「ボレロ」そして挾間美帆氏による「光」（委嘱新作・世界初演）等が演奏されました。

メンバー出演情報
4VIOLAS　3rd Concert ～舞い踊る旋律、ヴィオラの響き～

日時　9月27日（金）19:00開演（18:30開場）
会場　日本基督教団 霊南坂教会（東京都港区赤坂1-14-3　六本木一丁目駅下車徒歩5分）
出演　飯 顕、栗林衣李、松本 麗、杉浦 文（東京フィル フォアシュピーラー）
（以上、ヴィオラ）
曲目　O.レスピーギ／リュートのための古風な舞曲とアリア
C.サン＝サーンス／死の舞踏
M.ファリャ／4つのスペイン小品
A.ドヴォルザーク／スラヴ舞曲Op.46より
料金　一般￥3,000　学生￥1,500
問合せ　4violas.concert@gmail.com

8月よりホルン・セクション（試用期間）に小椋陽咲（おぐら・ひさき）が入団しました。

「はじめまして。この度8月より入団する事になりましたホルンの小椋陽咲と申します。

オーケストラに一番最初に興味を持ったのは習い事でバレエをやっていた時でした。当時はバレリーナになりたいと思っていましたが、ホルンをはじめてからはいつかオーケストラピットに入りたい！と夢見ていました。

バレエやオペラの公演も沢山されている東京フィルで演奏させていただける事はとても嬉しいですし、クラシック音楽だけでなく様々なジャンルの音楽を演奏できる事、とても嬉しく思います。

オーケストラの一員として皆さまにお会いできる日を楽しみにしています！」

Photo Reports　2024年7月·8月のコンサートより

7月·8月は定期演奏会に加え「午後のコンサート」3公演、そして黒柳徹子の「ハートフルコンサート」と、親しみやすい公演が続きました。東京フィルとのゆかり深いマエストロとの“再会”から、「午後コン」初登場の若きマエストロまで、多彩な公演をお届けしました。

第34回 平日の午後のコンサート(7/4)
第22回 渋谷の午後のコンサート(7/7)
〈夏のパリへ〉

今井光也／オリンピック東京大会ファンファーレ
古関裕而／東京オリンピック·マーチ
ブリテン／青少年のための管弦楽入門*
プーランク(フランセ編)／
　『子象のババールの物語』*
久石譲／映画『菊次郎の夏』より「Summer」
久石譲／映画『ハウルの動く城』より
　「人生のメリーゴーランド」
モーツァルト／交響曲第31番『パリ』

指揮とピアノとお話：三ツ橋敬子
語り：大山大輔*
コンサートマスター：依田真宣

マエストロ三ツ橋敬子の弾き振りやバリトン歌手大山大輔さんの語りで、パリ五輪に想いを馳せました

7月定期演奏会(7/24、28、29)

撮影=藤本崇／上野隆文(*)

指揮：ダン·エッティンガー(桂冠指揮者)　ピアノ：阪田知樹*
コンサートマスター：三浦章宏

モーツァルト／ピアノ協奏曲第20番*
【ソリスト·アンコール】
　マルチェッロ(J.S.バッハ編)／オーボエ協奏曲ニ短調BWV974より第2楽章(7/24)
　ドビュッシー／前奏曲集第1巻より第11曲「パックの踊り」(7/28)
　ドビュッシー／前奏曲集第1巻より第8曲「亜麻色の髪の乙女」(7/29)
ブルックナー／交響曲第4番『ロマンティック』(ノヴァーク版第2稿)〈ブルックナー生誕200年〉

定期演奏会には10年ぶりの登場となった桂冠指揮者ダン·エッティンガー。東京フィルとの共演数多い阪田知樹さんとの共演では新鮮な魅力に満ちたモーツァルトを披露(*)

メインプログラムでは生誕200年を迎えたブルックナーの名曲『ロマンティック』で充実の音色をお届けしました(*)

第103回 休日の午後のコンサート(8/12)〈山の思い出〉

指揮とお話：横山 奏　ヴァイオリン：辻 彩奈*
ゲスト：石丸謙二郎
コンサートマスター：近藤 薫

グリーグ／劇付随音楽『ペール・ギュント』より
　「朝～山の魔王の宮殿にて」
ヴィヴァルディ／『四季』より「夏」*
モンティ／チャールダーシュ*
【ソリスト・アンコール】エルガー／愛のあいさつ
R. ロジャース／サウンド・オブ・ミュージック・セレクション
ムソルグスキー／交響詩『はげ山の一夜』
J.シュトラウスⅡ／ワルツ『ウィーンの森の物語』
【オーケストラ・アンコール】
　J. シュトラウスⅡ／シャンパン・ポルカ

登山を趣味とするマエストロ横山と俳優 石丸謙二郎さんが「山トーク」でコンサートを盛り上げました

右からマエストロ横山、ソリスト辻彩奈さん、石丸謙二郎さん、コンサートマスター近藤薫

ハートフルコンサート2024(8/15)

お話：黒柳徹子　ゲスト(歌)：平原綾香*
指揮：円光寺雅彦
ゲスト・コンサートマスター：荒井英治

ベルリオーズ／序曲『ローマの謝肉祭』
ドビュッシー＝ストコフスキー／月の光
作曲：渡辺俊幸、作詞：岡田惠和／
　おひさま～大切なあなたへ*
作詞・作曲：平原綾香／からっぽのハート*
ホルスト(作詞：吉元由美)／Jupiter*
ホルスト／組曲『惑星』より火星、金星、木星
【アンコール】ジョン・レノン／イマジン

東京フィル副理事長・黒柳徹子のお話とマエストロ円光寺雅彦の指揮のもと平原綾香さんが大ヒット曲「Jupiter」ほかを歌い上げ、会場は感動に包まれました　©2/FaithCompany

クラシック音楽に魅せられて

連載 27

音楽には子どもの心がいい

会社経営／翻訳家
松矢 英晶

東京フィルのゆかりの方々に、クラシック音楽に魅了されたきっかけや音楽生活について綴っていただく本連載。第27回は、国際金融の現場で長く活躍され、翻訳業や障害者スポーツのコーチとしても第一線で多岐にわたる活動をされている松矢英晶様が、幼少期から海外生活を経て現在に至るまでの音楽とのかかわりについて、また、今年6月の定期演奏会で感じられた新鮮な感動を綴ってくださいました。

クラシック音楽と私の出会いを考えると、それは家の中だったかもしれない。音楽家の家庭という訳ではないのだが両親とも音楽が好きで、洋風の生活様式と西洋のクラシック音楽という家庭だった。弟も私も小学校に上がる頃にヴァイオリンを始め、ジュニアオーケストラで演奏した。音楽に対して特別な思い入れがあったわけではなく、ただこれが普通のことだと思ってヴァイオリンを弾いていた。

中学生になる頃にトランペットに魅了され、ジャズの虜になり、アメリカに留学するときも楽器を持って行った。文字通り小脇に抱えて。留学中は現地のジャズミュージシャンにまじってライブハウスで演奏した。「若さに怖いものなし」そのままの無謀ぶりだが素晴らしい経験をした。

アルペンスキーのボランティアコーチとしての顔も

そして二十数年、その間の長い外国生活でも、ジャズとブロードウェイやウェスト・エンドでの芝居見物ばかりで、クラシック音楽のことはすっかり頭から抜けていた。

留学直前、2つのビッグバンドとコンボグループに参加していた頃のカルテット演奏

帰国後しばらくして、東京フィル首席トランペット奏者との知己を得る幸運があった。年末の東京フィル第九交響曲が私にとって久しぶりのクラシックコンサートだったので、少しかしこまって演奏を待った。音楽が終わった時にはあまりの感激に腰が抜けたようになり、身体を動かすことも拍手をすることすらできなかった。極限まで感動するとこうなるのか。

今年6月の定期演奏会、メシアンのトゥランガリーラ交響曲は、私にまた新しい世界を開いてくれた。演奏前、この難解な音楽を聴いて楽しいとは期待していなかった。すると、「マエストロ チョン・ミョンフンが語る：. . . 子どものような耳で聴いてみて下さい。きっと楽しめると思いますよ」。

音楽が始まると、思いもかけない光景が目の前に現れた：私の眼の前に眠る子供。私が見ているのはその子の寝姿ではなく、眠る子の頭の中。その子の心が何のわだかまりも束縛もなく、純粋なまでに自由奔放に自分の世界を駆けている。あぁ、これは子どもの心だ、心というカオスだ。これほど楽しく、美しいカオスが音で奏でられるとは！　知らぬ間に私は微笑んでいた。音楽が俄然楽しくなってきた。

マエストロ チョンの意味したことを取り違えているかもしれないけれど、私にとって最高のメシアンだった。マエストロのさりげない偉大さにも改めて感服した。

音楽にあふれた生活に感謝と幸せを感じながら、ジャズバンドをかけもちし、せっせと東京フィルのコンサートに通っている。

松矢英晶（まつや ひであき）／米大学大学院（経済学）修了。ニューヨーク、ロンドン、パリ、東京の金融市場で活動。海外投資会社日本代表。コンサルティング会社経営。学術書、財務から紀行文など幅広い分野の翻訳にも携わっている。また十数年来、障害者スポーツのボランティアコーチとして、知的障害者を対象とする国際スポーツ団体スペシャルオリンピックスでアルペンスキーと水泳競技のコーチ、また視覚障害者スキーのサポーター・コーチとして活動している。

皆様におかれましてはお健やかにお過ごしのことと存じます。
今月は、ヴェルディの歌劇『マクベス』をオペラ演奏会形式でお送りいたします。
マエストロと名歌手陣の共演をぜひお楽しみください。
引き続き、当楽団を何卒よろしくお願い申し上げます。

東京フィルハーモニー交響楽団 理事長　三木谷 浩史

賛助会

東京フィルハーモニー交響楽団の活動は、皆様のご寄附により支えていただいております。
ここに法人ならびに個人賛助会員（パートナー会員）の皆様のご芳名を掲げ、
改めて御礼申し上げます。

オフィシャル・サプライヤー（敬称略）

ソニーグループ株式会社	代表執行役　社長 COO 兼 CFO	十時 裕樹
楽天モバイル株式会社	代表取締役会長	三木谷 浩史
株式会社マルハン	代表取締役 会長	韓 昌祐
株式会社ロッテ	代表取締役社長執行役員	中島 英樹
株式会社ゆうちょ銀行	取締役兼代表執行役社長	笠間 貴之

法人会員

賛助会員（五十音順・敬称略）

(株)IHI
代表取締役社長　井手 博

(株)アイエムエス
取締役会長　前野 武史

(医)相澤内科医院
理事長　相澤 研一

アイ・システム(株)
代表取締役会長　松﨑 務

(株)アシックス
シニアアドバイザー　尾山 基

(株)インターテクスト
代表取締役　海野 裕

ANAホールディングス(株)
代表取締役社長　芝田 浩二

(株)NHKエンタープライズ
代表取締役社長　有吉 伸人

大塚化学(株)
特別相談役　大塚 雄二郎

(株)オーディオテクニカ
代表取締役社長　松下 和雄

(公財)オリックス宮内財団
代表理事　宮内 義彦

カシオ計算機(株)
代表取締役 社長 CEO　増田 裕一

キヤノン(株)
代表取締役会長兼社長 CEO　御手洗 冨士夫

(株)グリーンハウス
代表取締役社長　田沼 千秋

サントリーホールディングス(株)
代表取締役社長　新浪 剛史

信金中央金庫
理事長　柴田 弘之

(株)J.Y.PLANNING
代表取締役　遅澤 准

(株)滋慶
代表取締役社長　田仲 豊徳

(株)ジーヴァエナジー
代表取締役社長　金田 直己

菅波楽器(株)
代表取締役社長　菅波 康郎

相互物産(株)
代表取締役社長　小澤 真也

ソニーグループ(株)
代表執行役　社長 COO 兼 CFO 十時 裕樹

ソニー生命保険(株)
代表取締役社長　髙橋 薫

(株)ソニー・ミュージックエンタテインメント
代表取締役社長CEO　村松 俊亮

(株)大丸松坂屋百貨店
代表取締役社長　宗森 耕二

都築学園グループ
総長　都築 仁子

東急(株)
取締役社長　堀江 正博

東京オペラシティビル(株)
代表取締役社長　長島 誠

東レ(株)
代表取締役社長　大矢 光雄

TOPPANエッジ(株)
代表取締役社長　添田 秀樹

DOWAホールディングス(株)
代表取締役社長　関口 明

(株)ニチイケアパレス
代表取締役社長　秋山 幸男

(株)ニフコ
代表取締役社長　柴尾 雅春

日本ライフライン(株)
代表取締役社長　鈴木 啓介

(株)パラダイスインターナショナル
代表取締役　新井 秀之

富士電機(株)
代表取締役会長 CEO　北澤 通宏

(株)不二家
代表取締役社長　河村 宣行

(株)三井住友銀行
頭取CEO　福留 朗裕

三菱地所(株)
執行役社長　中島 篤

三菱倉庫(株)
代表取締役 社長　斉藤 秀親

(株)三菱UFJ銀行
特別顧問　小山田 隆

ミライラボバイオサイエンス(株)
代表取締役　田中 めぐみ

(株)明治
代表取締役社長　松田 克也

森ビル(株)
代表取締役社長　辻 慎吾

ヤマトホールディングス(株)
代表取締役社長　長尾 裕

(株)山野楽器
代表取締役社長　山野 政彦

ユニアデックス株式会社
代表取締役社長　田中 建

ユニオンツール(株)
代表取締役会長　片山 貴雄

(医)ユベンシア
理事長　今西 宏明

楽天モバイル(株)
代表取締役会長　三木谷 浩史

(株)リソー教育
代表取締役社長　天坊 真彦

後援会員

(株)アグレックス
代表取締役社長　山本 修司

(医)エレソル　たにぐちファミリークリニック
理事長　谷口 聡

欧文印刷(株)
代表取締役社長　和田 美佐雄

(有)オルテンシア
代表取締役　雨宮 睦美

(医)カリタス菊山医院
理事長　加藤 徹

(医)康明会
理事長　遠藤 正樹

(医)だて内科クリニック
理事長　伊達 太郎

(宗)東京大仏・乗蓮寺
代表役員　若林 隆壽

(一財)凸版印刷三幸会
代表理事　金子 眞吾

(株)日税ビジネスサービス
代表取締役会長兼社長　吉田 雅俊

(株)ネスト
代表取締役　太田 潤

富士通(株)
代表取締役社長　時田 隆仁

本田技研工業(株)
取締役　代表執行役社長　三部 敏宏

三菱電機(株)
執行役社長　漆間 啓

ご支援の御礼とお願い

昨今の社会情勢において、皆様からたくさんの励ましのお言葉とともに、東京フィルに温かいご支援をいただいておりますこと、心より御礼申し上げます。

東京フィルハーモニー交響楽団は、1911年（明治44年）に創設され、この西洋発祥の音楽文化を日本の近代化の中でいちはやく受容し、様々な試行錯誤を繰り返しつつ、音楽を社会に届けるという使命を貫いて参りました。

東京フィルは世界でも数少ない自主運営の楽団です。

今後もさらに安定的・発展的な財政基盤を構築し、いっそうの発展をはかるために、皆様のご寄附が力となります。

皆様におかれましては、あらためて当団を取り巻く状況についてご理解を賜りますとともに、一層のご支援・ご助力を賜りますよう、心よりお願い申し上げます。東京フィルが取り組む、実り豊かな未来を創る活動へのご支援をお願い申し上げます。

弊団へのご寄附をいただけます際には、こちらの口座のいずれかにお振込みいただけましたら幸いです。個人として1万円以上、法人として30万円以上のご寄附をご検討いただける際は、賛助会（次ページ）も併せてご覧ください。

金融機関名	ゆうちょ銀行（郵便振替）	三井住友銀行・東京公務部（096）
口座番号	00120-2-30370	普通預金 3003239
口座名義	公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団	

※寄附金額は自由に設定いただけます。
※振込手数料、通信費は恐れ入りますがご負担くださいますようお願い申し上げます。
※領収証書が必要な方は、別途配布しております「寄附申込書」に必要事項を記入し、
　下記送付先へご送付ください。
　寄附申込書の書式は下記ウェブサイトまたは問合せ先へご照会ください。

寄附申込書・賛助会入会申込書はこちらからも取得いただけます。
https://www.tpo.or.jp/support

ご支援・賛助会に関するお問合せ／寄附申込書　送付先

公益財団法人 東京フィルハーモニー交響楽団・広報渉外部　寄附担当
〒163-1408　東京都新宿区西新宿3-20-2　東京オペラシティタワー8階
Fax: 03-5353-9523　　Eメール: partner@tpo.or.jp
Tel: 03-5353-9521（土日祝日を除く10時～18時）

東京フィルの賛助会（応援団）に入りませんか？

2024年に東京フィルハーモニー交響楽団は創立113年を迎えました。

これまでの歩みは、東京フィルとその音楽を愛する皆様の日頃からの大きなご支援とご助力なしには実現しえないものでした。心より御礼申し上げます。

東京フィルは 1月をシーズンのスタートに据え、年間を通じて皆様の暮らしに音楽をお届けしてまいります。国際的に活躍する音楽家や将来を嘱望される若い演奏家を招いての定期演奏会や「午後のコンサート」シリーズ、「第九」「ニューイヤーコンサート」などの特別演奏会や提携都市公演、学校や公共施設での音楽活動を通じ、今後も社会に広くオーケストラの価値を認知いただけるよう活動を続けてまいります。この活動を通じて、日本の芸術文化の発展に寄与し、今後ますます多様化・複雑化するグローバル社会において不可欠な心の豊かさ・寛容さを育み、次世代へと続く文化交流の懸け橋となるよう、より一層努めてまいります。

さまざまな形で青少年に演奏を届ける活動を続けています

ぜひとも皆様方からの継続的なご支援を賜りますよう、謹んでお願い申し上げます。

東京フィルハーモニー交響楽団

賛助会（法人／パートナー（個人））会員の種別

オフィシャル・サプライヤー　※

法人会員	年会費1口
賛助会員	50万円
後援会員	30万円
パートナー会員	
ワンハンドレッドクラブ	100万円
フィルハーモニー	50万円
シンフォニー	30万円
コンチェルト	10万円
ラプソディ	5万円
インテルメッツォ	3万円
プレリュード	1万円

※オフィシャル・サプライヤーの詳細はお問い合わせください。
東京フィルハーモニー交響楽団は内閣府により「公益財団法人」に認定されており、ご寄附の金額に応じて税法上の優遇措置を受けることができます。
その他特典、お申込みや資料請求など、詳しくは東京フィル広報渉外部担当へお問合せください。

寄附をご検討くださいます際には、主催公演会場「ご支援カウンター」またはウェブサイト、東京フィル担当（partner@tpo.or.jp）までお尋ねください。
ご入会の後は、1年ごとに継続のご案内をお送りいたします。

【賛助会に関するお問合せ・お申込み】
東京フィルハーモニー交響楽団　広報渉外部（担当：星野・鹿又（かのまた））
Tel: 03-5353-9521（平日10時～18時）　Eメール: partner@tpo.or.jp

活動のご報告

皆様のご寄附は東京フィルの様々な活動を支えています。

フランチャイズ・ホール、事業提携都市との連携

東京フィルは、フランチャイズ・ホールであるBunkamuraオーチャードホール等での定期演奏会の他、東京都文京区、千葉県千葉市、長野県軽井沢町、新潟県長岡市の各地域と事業提携を結び、定期演奏会、親子のためのコンサートや中高生などへの楽器ワークショップ等、地域の皆様との交流を通じ音楽の魅力をお届けしています。

文化庁「舞台芸術等総合支援事業（学校巡回公演事業）」

文化庁が主催する本事業として、日本全国の小中学校や特別支援学校を訪問し、一流の文化芸術団体による巡回公演を行っています。東京フィルは国内オーケストラでは唯一、文化庁から8年間の長期採択を受け(2014～2021年度)、東日本大震災地域を含む北海道・東北地区の小中学校115校、のべ46,279名の児童・生徒、地域の皆様と交流を行い、2019年度からは、これに加え、関東・東海・中国地区の小中学校61校のべ20,389名の児童・生徒に音楽をお届けしました。2022年度より東京フィルは中国地区の担当として新たに長期採択（2022～2024年度）を受け、2023年度も6月から1月にかけ、8校の小中学校を訪問し、ワークショップとオーケストラ公演を開催いたしました。

小学校体育館でのオーケストラ本公演

留学生の演奏会ご招待･･･留学生招待シート

東京フィルでは国際交流事業の一環として、海外からの留学生や研修員の方々を定期演奏会へご招待する「留学生招待シート」を設けており、皆様からご寄附いただいたチケットも有効に活用させていただきます。詳しくは東京フィルチケットサービス（03-5353-9522）までお問合せください。

定期演奏会に来場のJICA東京研修生の皆様とチョン・ミョンフン（2019年7月東京オペラシティ定期）

©上野隆文

“とどけ心に”特別招待シート

東京フィルでは2011年の東日本大震災をきっかけに、自然災害などやむを得ない事情により国や地域を問わず故郷から避難されているかたがたを当団の主催公演にご招待する取り組みを行っています。招待をご希望の方は、東京フィルチケットサービス(03-5353-9522)まで、支援団体として東京フィルの演奏会を活用したいという場合は、東京フィル事務局(03-5353-9521)広報渉外部担当までご相談ください。

ご来場いただけなくなった定期演奏会チケットのご寄附について

東京フィルでは、ご購入いただきながらご来場いただけなくなった定期演奏会のチケットをご寄附いただき「留学生招待シート」「“とどけ心に”特別招待シート」として活用させていただいております。お手元にご来場いただけない公演チケットがございましたら、ぜひ東京フィルへご寄附ください。大切に使わせていただきます。

お問合せ・お申込み
東京フィルチケットサービス
電話:03-5353-9522
(10時～18時／土日祝休)

7月の演奏会のチケットのご寄附をいただきました。心より御礼申し上げます。

稲垣 千春、管野 克和、小宮 正安、佐々木 三春、吉峯 裕毅　(他匿名希望13名)

(五十音順・敬称略)

特別公演、公演協賛、広告のご案内

東京フィルハーモニー交響楽団は、様々な音楽活動を通して、企業様の大切な節目である周年記念事業や式典、福利厚生イベント等でご活用いただけるオンリーワンの特別企画を展開しております。

- **周年事業や記念イベントとして大切なお客様を招待したコンサートを開きたい**
- **商品や新事業のプロモーションとして何か施策を考えたい**
- **式典や学会などでの演奏を企画したい**
- **東京フィルの公演プログラムに広告を掲載したい**
- **新製品、サンプルを会場で販売・配布したい**

日中国交正常化45周年記念上海公演後のレセプションにて

どうぞお気軽にご用命ください。

【広告・協賛のお問合せ】　東京フィルハーモニー交響楽団　広報渉外部
Tel: 03-5353-9521(平日10時～18時)　Eメール: partner@tpo.or.jp

東京フィルハーモニー交響楽団 1911年創立 楽団員

Tokyo Philharmonic Orchestra Since 1911 / Musicians

名誉音楽監督
Honorary Music Director

チョン・ミョンフン
Myung-Whun Chung

首席指揮者
Chief Conductor

アンドレア・バッティストーニ
Andrea Battistoni

桂冠指揮者
Conductor Laureate

尾高 忠明
Tadaaki Otaka

大野 和士
Kazushi Ono

ダン・エッティンガー
Dan Ettinger

特別客演指揮者
Special Guest Conductor

ミハイル・プレトニョフ
Mikhail Pletnev

アソシエイト・コンダクター
Associate Conductor

チョン・ミン
Min Chung

永久名誉指揮者
Permanent Honorary Conductor

山田 一雄
Kazuo Yamada

永久楽友・名誉指揮者
Permanent Member and
Honorary Conductor

大賀 典雄
Norio Ohga

コンサートマスター
Concertmasters

近藤 薫
Kaoru Kondo

三浦 章宏
Akihiro Miura

依田 真宣
Masanobu Yoda

第1ヴァイオリン
First Violins

小池 彩織☆
Saori Koike

榊原 菜若☆
Namo Sakakibara

平塚 佳子☆
Yoshiko Hiratsuka

浅見 善之
Yoshiyuki Asami

浦田 絵里
Eri Urata

景澤 恵子
Keiko Kagesawa

加藤 光
Hikaru Kato

巖築 朋美
Tomomi Ganchiku

坂口 正明
Masaaki Sakaguchi

鈴木 左久
Saku Suzuki

高田 あきの
Akino Takada

田中 秀子
Hideko Tanaka

栃本 三津子
Mitsuko Tochimoto

中澤 美紀
Miki Nakazawa

中丸 洋子
Hiroko Nakamaru

廣澤 育美
Ikumi Hirosawa

弘田 聡子
Satoko Hirota

藤瀬 実沙子
Misako Fujise

松田 朋子
Tomoko Matsuda

第2ヴァイオリン
Second Violins

藤村 政芳◎
Masayoshi Fujimura

水鳥 路◎
Michi Mizutori

宮川 正雪◎
Masayuki Miyakawa

高瀬 真由子☆
Mayuko Takase

石原 千草
Chigusa Ishihara

出原 麻智子
Machiko Idehara

太田 慶
Kei Ota

葛西 理恵
Rie Kasai

佐藤 実江子
Mieko Sato

本堂 祐香
Yuuka Hondo

山代 裕子
Yuko Yamashiro

吉田 智子
Tomoko Yoshida

吉永 安希子
Akiko Yoshinaga

若井 須和子
Suwako Wakai

渡邊 みな子
Minako Watanabe

ヴィオラ
Violas

小峰 航一◎
Koichi Komine

須田 祥子◎
Sachiko Suda

須藤 三千代◎
Michiyo Suto

加藤 大輔○
Daisuke Kato

今川 結☆
Yui Imagawa

杉浦 文☆
Aya Sugiura

伊藤 千絵
Chie Ito

岡保 文子
Ayako Okayasu

曽和 万里子
Mariko Sowa

高橋 映子
Eiko Takahashi

手塚 貴子
Takako Tezuka

中嶋 圭輔
Keisuke Nakajima

蛭海 たづ子
Tazuko Hirumi

古野 敦子
Atsuko Furuno

村上 直子
Naoko Murakami

森田 正治
Masaharu Morita

チェロ
Cellos

金木 博幸◎
Hiroyuki Kanaki
服部 誠◎
Makoto Hattori
渡邉 辰紀◎
Tatsuki Watanabe
黒川 実咲☆
Misaki Kurokawa
高麗 正史☆
Masashi Korai
石川 剛
Go Ishikawa
大内 麻央
Mao Ouchi
太田 徹
Tetsu Ota
菊池 武英
Takehide Kikuchi
佐々木 良伸
Yoshinobu Sasaki
長谷川 陽子
Yoko Hasegawa
渡邊 文月
Fuzuki Watanabe

コントラバス
Contrabasses

片岡 夢児◎
Yumeji Kataoka
黒木 岩寿◎
Iwahisa Kuroki
遠藤 柊一郎
Shuichiro Endo
小笠原 茅乃
Kayano Ogasawara
岡本 義輝
Yoshiteru Okamoto
小栗 亮太
Ryota Oguri
熊谷 麻弥
Maya Kumagai
菅原 政彦
Masahiko Sugawara
田邊 朋美
Tomomi Tanabe
中村 元優
Motomasa Nakamura

フルート
Flutes

神田 勇哉◎
Yuya Kanda
斉藤 和志◎
Kazushi Saito
さかはし 矢波
Yanami Sakahashi
菅野 力
Chikara Sugano

オーボエ
Oboes

荒川 文吉◎
Bunkichi Arakawa
佐竹 正史◎
Masashi Satake
岡村 彩香
Ayaka Okamura
杉本 真木
Maki Sugimoto
若林 沙弥香
Sayaka Wakabayashi

クラリネット
Clarinets

アレッサンドロ・ベヴェラリ◎
Alessandro Beverari
万行 千秋◎
Chiaki Mangyo
黒尾 文恵
Fumie Kuroo
鳥潟 さくら
Sakura Torigata
林 直樹
Naoki Hayashi

ファゴット
Bassoons

河野 星◎
Akari Kono
チェ・ヨンジン◎
Young-Jin Choe
廣幡 敦子◎
Atsuko Hirohata
井村 裕美
Hiromi Imura
桔川 由美
Yumi Kikkawa
森 純一
Junichi Mori

ホルン
Horns

齋藤 雄介◎
Yusuke Saito
高橋 臣宜◎
Takanori Takahashi
磯部 保彦
Yasuhiko Isobe
大東 周
Shu Ohigashi
小椋 陽咲
Hisaki Ogura
木村 俊介
Shunsuke Kimura
佐藤 俊輝
Toshiki Sato
田場 英子
Eiko Taba
塚田 聡
Satoshi Tsukada
豊田 万紀
Maki Toyoda
西川 優弥
Yuya Nishikawa
山内 研自
Kenji Yamanouchi

トランペット
Trumpets

川田 修一◎
Shuichi Kawata
野田 亮◎
Ryo Noda
古田 俊博◎
Toshihiro Furuta
杉山 眞彦
Masahiko Sugiyama

トロンボーン
Trombones

辻 姫子◎
Himeko Tsuji
中西 和泉◎
Izumi Nakanishi
石川 浩
Hiroshi Ishikawa
五箇 正明
Masaaki Goka
藤田 恵輔
Keisuke Fujita
山内 正博
Masahiro Yamauchi

テューバ
Tubas

大塚 哲也
Tetsuya Otsuka
荻野 晋
Shin Ogino

ティンパニ&パーカッション
Timpani & Percussion

岡部 亮登◎
Ryoto Okabe
塩田 拓郎◎
Takuro Shiota
秋田 孝訓
Takanori Akita
木村 達志
Tatsushi Kimura
鷹羽 香緒里
Kaori Takaba
中村 勇輝
Yuki Nakamura
縄田 喜久子
Kikuko Nawata
船迫 優子
Yuko Funasako
古谷 はるみ
Harumi Furuya

ハープ
Harps

梶 彩乃
Ayano Kaji
田島 緑
Midori Tajima

ライブラリアン
Librarian

武田 基樹
Motoki Takeda

ステージマネージャー
Stage Managers

稲岡 宏司
Hiroshi Inaoka
大田 淳志
Atsushi Ota
古谷 寛
Hiroshi Furuya

◎首席奏者
Principal

○副首席奏者
Assistant Principal

☆フォアシュピーラー
Vorspieler

東京フィルハーモニー交響楽団

1911年創立。日本で最も長い歴史をもつオーケストラ。メンバー約160名、シンフォニーオーケストラと劇場オーケストラの両機能を併せもつ。名誉音楽監督にチョン･ミョンフン、首席指揮者アンドレア･バッティストーニ、特別客演指揮者にミハイル･プレトニョフを擁する。Bunkamuraオーチャードホール、東京オペラシティ コンサートホール、サントリーホールでの定期演奏会や「渋谷／平日／休日の午後のコンサート」等の自主公演、新国立劇場等でのオペラ･バレエ演奏、『名曲アルバム』『NHKニューイヤーオペラコンサート』『題名のない音楽会』『東急ジルベスターコンサート』『NHK紅白歌合戦』『クラシックTV』『いないいないばあっ!』などの放送演奏により、全国の音楽ファンに親しまれる存在として高水準の演奏活動と様々な教育的活動を展開している。海外公演も積極的に行い、国内外から高い評価と注目を集めている。2020～21年のコロナ禍における取り組みはMBS『情熱大陸』、NHK BS1『BS1スペシャル 必ずよみがえる～魂のオーケストラ 1年半の闘い～』などのドキュメンタリー番組で取り上げられた。

1989年よりBunkamuraオーチャードホールとフランチャイズ契約を結んでいる。東京都文京区、千葉県千葉市、長野県軽井沢町、新潟県長岡市と事業提携を結び、各地域との教育的、創造的な文化交流を行っている。

Tokyo Philharmonic Orchestra

In 2024, the Tokyo Philharmonic Orchestra celebrates its 113th anniversary as Japan's first symphony orchestra. With about 160 musicians, Tokyo Phil regulary performs both symphonies and operas. Tokyo Phil is proud to have appointed Maestro Myung-Whun Chung, who has been conducting Tokyo Phil since 2001, as Honorary Music Director, Maestro Andrea Battistoni as Chief Conductor and Maestro Mikhail Pletnev as Special Guest Conductor.

Tokyo Phil has established its world-class reputation through its subscription concert series, regular opera and ballet assignments at the New National Theatre, and a full, ever in-demand musical agenda around Japan and the world, including broadcasting with NHK Broadcasting Corporation, various educational programs, and tours abroad.

Tokyo Phil has partnerships with Bunkamura Orchard Hall, the Bunkyo Ward in Tokyo, Chiba City, Karuizawa Cho in Nagano and Nagaoka City in Niigata.

Official Website / SNS　https://www.tpo.or.jp/

©上野隆文

東京フィルWEB

役員等・事務局・団友

役員等（理事・監事および評議員）

理事長
三木谷 浩史

副理事長
黒柳 徹子

専務理事
石丸 恭一

常務理事
工藤 真実

理事
浮舟 邦彦
大賀 昭雄
大塚 雄二郎
小山田 隆
田沼 千秋
玉木 林太郎
寺田 琢
遠山 敦子
野本 弘文
韓 昌祐
平井 康文
宮内 義彦

監事
岩崎 守康
山野 政彦

評議員
伊東 信一郎
佐治 信忠
鈴木 啓介
瀬谷 博道
日枝 久

事務局

楽団長
石丸 恭一

事務局長
工藤 真実

公演事業部
市川 悠一
岩崎 井織
大久保 里香
大谷 絵梨奈
佐藤 若菜
村尾 真希子
吉田 結衣

ステージマネージャー
稲岡 宏司
大田 淳志
古谷 寛

ライブラリアン
武田 基樹

広報渉外部
伊藤 唯
鹿又 紀乃
千木 加寿子
二木 憲史
星野 友子
松井 ひさえ
安田 ひとみ

総務・経理
川原 明夫
鈴木 美絵

団友

安藤 栄作
池田 敏美
糸井 正博
今井 彰
井料 和彦
岩崎 龍彦
植木 佳奈
上野 眞行
生方 正好
大兼久 輝宴
大澤 昌生
大和田 皓
岡部 純
小榑 敦子
小山 智子
甲斐沢 俊昭
加藤 明広
加藤 博文
金崎 真由美
川人 洋二
木村 友博
黒川 正三
黒沢 誠登
河野 啓子
近藤 勉
今野 芳雄
齊藤 匠
坂口 和子
嵯峨 正雄
嵯峨 美穂子
桜木 弘子
笹 翠
佐々木 等
佐野 恭一
清水 真佐子
瀬尾 勝保
高岩 紀子
高野 和彦
高村 千代子
竹林 良
竹林 陽子
田中 千枝
田村 武雄
津田 好美
戸坂 恭毅
長池 陽次郎
長岡 愼
長倉 穣司
新田 清枝
新田 伸雄
二宮 純
野仲 啓之助
畑中 和子
玻名城 昌子
福村 忠雄
藤原 勲
古野 淳
細川 克己
細洞 寛
本田 詩子
松澤 久美子
湊 貞男
宮原 真弓
山屋 房子
吉田 啓義
米倉 浩喜
脇屋 俊介

〈発行日〉2024（令和6）年9月15日　〈発行人〉石丸 恭一
〈発行所〉東京フィルハーモニー交響楽団
〒163-1408 東京都新宿区西新宿3-20-2 東京オペラシティタワー8F　Tel 03-5353-9521 Fax 03-5353-9523
フランチャイズ・ホール：Bunkamuraオーチャードホール　提携：千葉市 文京区 軽井沢町 長岡市
〈デザイン・本文イラスト〉米田デザイン事務所　〈表紙画〉ハラダチエ　〈編集協力〉ひとま舎
〈印　刷〉欧文印刷株式会社
©Tokyo Philharmonic Orchestra ＊無断転載を禁ず（非売品）

～コンサートをお楽しみいただくために～

♪チケットの座席番号をチェック！

・本日のコンサートは全席指定です。チケットに記載されたお席にご着席ください。

♪開演時間をチェック！

・時間に余裕をもってご着席ください。演奏中のご入場は、固くお断りいたします。楽章間の入場も楽曲の進行により制限させていただきます。
・曲間・楽章間での退場につきましては、体調に不安がある場合など、無理せずご判断ください。その際、周りのお客様の鑑賞の妨げとならぬようご配慮ください。

♪開演前に、お手元のお荷物や電子機器をチェック！

・許可のない録音・録画は固くお断りいたします。
・演奏中に、時計やスマートフォン、その他電子機器のアラーム音やディスプレイの光が漏れないよう、電源をお切りいただくか、マナーモードの設定をいま一度ご確認ください。
・動いたときに音の出る衣類やバッグ等は足元に。
・のど飴類は開封時に音が出ないものをご準備ください。咳が出そうな日はあらかじめお手元やお口の中に。

♪演奏中に気を付けたいことも同時にご確認を！

・演奏は最後の余韻まで余さずお楽しみください。早すぎる拍手や声援は他のお客様の鑑賞の妨げとなる場合がございます。

マナーを守ってコンサートをお楽しみください♪

こころの時間

Tokyo Philharmonic Orchestra　*Season 2024*